Philippine Camp 2016
In Butason- I

2016/02/18 ~ 3/18

BRGY Butason-1, Tabango, Leyte

Reported by FIWC Kyushu

目次

１．はじめに

２．FIWC とは

３．重要人物紹介

４．ワーク地・訪問地紹介

５．活動日程

６．ワーク報告

７．生活状況

８．各係活動報告

・会計

・イベント

・保健

・ホームステイ

・KP（Kitchen Police）

９．他己紹介

１０．感想

１．はじめに

今まで約 10 年間プロジェクトを行ってきたマタグオブ市を離れ、タバンゴ市で初めてプロジェクトを行った。滞在したブタソン I 村は山奥の貧しい村だった。それでも彼らは見知らぬ日本人のことを笑顔で迎え入れ、理解しようとしてくれた。

子どもたちが覚えた日本語で話しかけてきてくれた。

全く話してくれなかった青年が、最終日には一緒にお酒を飲みながら「I miss you」と言ってくれた。

お母さんが「水道が近くにできて良かったわ、ありがとう」って言ってくれた。

そんな人々の些細な変化が嬉しくてたまらなかった。
日本人とフィリピン人。ただ生まれた場所が違うだけでこんなにも異なる生き方。それでもお互いが歩み寄れば本当の友達になれる。笑顔一つで「楽しい！」っていう時間を共有することができる。心と心を結ぶことができる。

私たちの小さな一歩が人と人とを結び、村が少しずつ変化する。
それはまだちっぽけな変化かもしれないけれど、いつか実を結び、村にたくさんの笑顔が溢れますように。

2015 年度フィリピンキャンプリーダー　林田梨里子

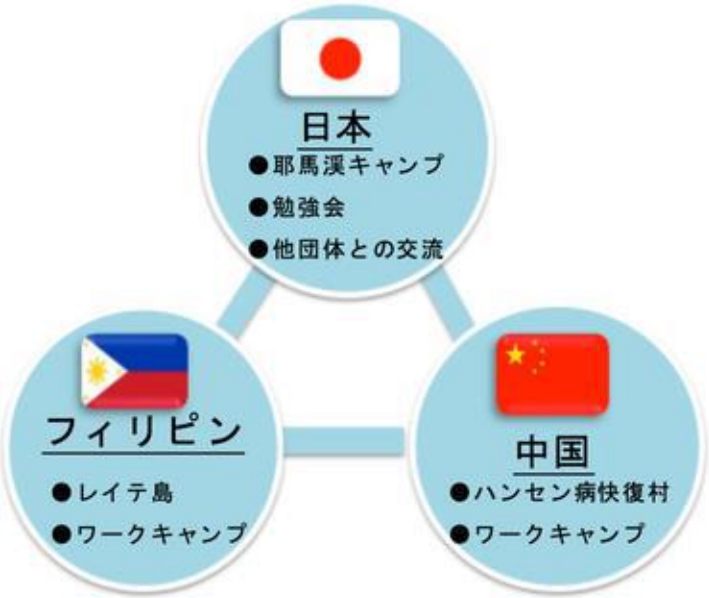
２．FIWC とは

Friends

International

Work

Camp



FIWC九州は九州（主に福岡）の大学生が主体となり、学生のみで国内外で国際協力を行っている学生NGO団体です。

＜国際活動＞
●中国キャンプ
ハンセン病快復村に行き、村人のケアやインフラ整備を中国の大学生と行う。
●フィリピンキャンプ
フィリピンレイテ島の貧困村を訪れ、インフラ整備を村人と共に行いながら交流を図る。

＜国内活動＞
●耶馬溪キャンプ
年3回大分県の耶馬溪で農業体験を行っている。
●FP(FIWC Party)
月1回程度、博多の「びおとーぷ」で行っている勉強会＆交流会
●その他
学祭、まんぱ（Monthly Party）、総会、国内合宿など

他にも自由な発想で自由な活動を行っている柔軟さがFIWC九州の特徴です。また、FIWCは九州の他、関東、関西、東海、広島に支部があり、互いに情報交換を行いながらそれぞれが自立した活動を行っています。

☆キャンパーだけでなく、国内活動も一緒に参加してくれる大学生を募集中！！！

３．重要人物紹介

●ロクロクさん（現地エンジニア）

1999 年から FIWC 関東のキャンプに参加していて、FIWC 九州発足後は九州のお世話をしてくださっている現地エンジニア。プロジェクトのみでなく生活面などもキャンプ中は一緒に生活して支えてくださっています。今回のキャンプではワークでの彼の負担が多かったにも関わらず、自分の体調よりも先にキャンパーが楽しめているかなどを気にかけてくれていました。FIWC のメンバーを心から愛してくれている、私たちのお父さん的存在です。

メイヤー（市長）

今回初めてワークを行ったタバンゴ市の市長さん。大きな市であるので市長の彼女は多忙ですが、挨拶のためムニシパル(市役所)を訪れた際には快く迎え入れてくれます。ワークが終わった後には彼女のプライベートビーチでのビーチパーティーへお誘いいただくほど、FIWC 九州がこのタバンゴ市で活動することを支援する姿勢をとってくれています。

●カピタン（村長）

今回のキャンプ地であるブタソン I村の村長さん。彼女の家でキャンパーは毎日ご飯を食べたり、女の子のキャンパーへベッドを用意してくれていたりとキャンプ中にたくさんキャンパーをお世話してくれました。羽目を外しすぎると厳しいチェックが入りますが、それもキャンパーを思ってのこと。いつも私たちを見守ってお世話してくれている優しい村長です。

●ナナイ・ピニング

ワーク地の一つであるパガパガンのワーク期間中はワーク地と滞在場所が少し遠いという理由で彼女の家にキャンパー全員滞在させてもらいました。小さなことにも気が付いていつでも優しく声をかけてくださり、その包容力にキャンパーも癒されていました。彼女の妹が以前日本人の男性と結婚していたこともあり、日本人や日本について興味を持っていて積極的にお話しをしてくれました。英語が堪能で品の良いおばあちゃんです。

●POLICE(現地の警察)

今回のキャンプ中 4 人 1 組の交代制で昼夜警備してくれていました。ブタソン I 村が山奥の村であり危ないことと、フィリピンがちょうど選挙期間中であり、その間に日本人に何かあれば支援してくれているメイヤーの責任になることもあって行動は必ずこの POLICE と共にすることが必要でした。しかし警察といっても彼らもフィリピン人であるので陽気で、日中の移動中も楽しく言葉を交わし、夜になれば共にお酒を酌み交わし語り合う仲です。フィリピンでは POLICE になることも難しく、村の人からするとエリート。POLICE だから知っているフィリピンの政治等の現状を話すなど日本とフィリピンの情報交換も盛んに行いました。

●NorWeLeDePAI

（North Western Leyte Development Parent's Association Inc.）

FIWC 九州と 2004 年から連携体制をとっている現地 NGO 団体です。この団体は、レイテ島北西部の村々で子供たちと両親が中心となってコミュニティの発展を目指す活動を行っており、World Vision から資金援助を受けています。毎回パスポート等の貴重品の管理をお願いしており、今回もパスポートを預かってもらっていました。

４．ワーク地・訪問地紹介

ブタソンＩ村

今回ワークを行った村。電気が通ってない集落や、トイレのない集落もあった。パラナス、パガパガン、マ二ゴン、ベリソンといった集落でワークを行った。私達は、キャンプの多くをプロパーのヘルスセンターで宿泊し、そこから各ワーク地へと移動した。
パガパガンでのワークの際は数日間、パガパガンで滞在を行った。村人は日本人に対してすごく親切であり、またイベントも村人と共に楽しむことができた。

タバンゴ市

今回のキャンプを行ったブタソンＩ村の属する市。レイテ島の西部に属し、海に面している。人口は約三万人。13 のバランガイ(村)がある。昔、ある人が海に漁に行った際にカニに挟まれ、”tabang mo(助けて)”と叫んだのが名前の由来だと言われている。

ブノイ村

前回のワーク地。ブノイはマタグオブ市に属しており、FIWC 九州は 2007～2015 年までの約 10 年間ワークをマタグオブ市で行っていた。比較的整備されている印象が強い。今回のキャンプでも資材を借りにブノイを訪れた。また、ワークの休日を利用して、ブノイ村を訪れたキャンパーもいる。

レイテレイテ市(Leyte, Leyte)

タバンゴ市の隣にある市。今回のキャンプで最も多くの頻度で利用したマーケットがある。ブタソンＩからボートで約 45 分位移動したところにある。交通手段としては、バイクや自転車に屋根のあるサイドカーを付けたトライシクルを利用した。
食品だけではなく、スリッパやおもちゃなどの雑貨や、ワークに必要な資材なども揃っていた。また、居住地も多くあった上に学校もあり栄えた印象があった。

オルモック市

レイテ島の大きな港町。レイテ島の西部に位置する。病院や大きなスーパーマーケットを始めとし、銀行、換金所など多くのものが揃っている。栄えている印象が強い。私達は、ここで船の乗り継ぎや資材の購入や換金を行った。

セブ

観光でリゾート地として有名なセブ島。フィリピンの中心部のビサヤ諸島にある細長い島。マニラ首都圏につぐ大都市圏であり、非常に栄えている。SM という大きなショッピングモールで私達は帰国前に買い物を行った。また、空港もセブの空港を利用した。

５．活動日程

MTG スケジュール

12/1(火)　第一回 MTG　@びおとーぷ
12/8(火)　第二回 MTG　@びおとーぷ
12/23(水)　第三回 MTG　@びおとーぷ
1/5(火)　第四回 MTG　@びおとーぷ
1/13(水)　第五回 MTG　@びおとーぷ
1/21(木)　第六回 MTG　@びおとーぷ
1/30(土)　最終 MTG　@びおとーぷ
1/30(土),31(日)　国内合宿@だいきゅんさん宅(篠栗)
2/18(木)～3/18(金)　本キャンプ
3/23(水)　事後 MTG　@びおとーぷ
4/23(土)　キャンプ報告会　@びおとーぷ

キャンプ日程

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
				2/18 出国 （セブ泊）	19 ノルウェル 表敬訪問 村到着	20 休養日 （カガワット MTG）
21 GAM @パガバガン	22 ワーク @パラナス	23	24 ワーク @パガバガン	25 パガバガンステイ	26	27 Japanese Festival @パガバガン
28 GAM @マニゴン @プロパー	29	3/1	2 ワーク @ベリソン	3	4	5 休養日
6 休養日	7	8 @マニゴン	9 ホームステイ	10	11 ムニシパル 訪問	12 Japanese Festival @プロパー
13 休養日	14 Beach Party	15	16 Farewell Party	17 村出発 （機内泊）	18 帰国	

※・表敬訪問…市役所（ムニシパル）を訪問し、市長や役員に挨拶をしたり、警察署にパスポートのコピーを渡したりする。

・GAM(General Assembly Meeting)…通称ジェネアセ。村人を集めてFIWC、決定したワークについて説明し、理解を得るための集会。

・カガワット…村役員を指す。

・基本的に土、日は休養日としているので、ワークは行っていない。

・主にヘルスセンターに滞在、太矢印の期間は滞在先が異なった。

・複数の場所でワークを行ったので、細矢印はそれぞれのワーク地で行ったワーク期間を示す。例えば、3 月 25 日は午前中パラナス、午後パガバガンでワークをした。

フライト日程

2/18(木)　13：40 福岡空港発→15：10 仁川国際空港着
　　19：40 仁川国際空港発→23：15 マクタン空港着

3/18(金)　 0：45 マクタン空港発→ 6：10 仁川国際空港着
　　11：10 仁川国際空港発→12：30 福岡空港着

６．ワーク報告

○概要

場所：フィリピン共和国レイテ島タバンゴ市ブタソンⅠ村パラナス・パガバガン・
　　ベリソン・マニゴン（すべて集落）

内容：Improvement of water systems（水道システムの改善）計 6 つ

期間：2 月 22 日（月）～3 月 10 日（木）（計 14 日間）※但し、土日を除く

参加者：FIWC 九州、村人、カガワット（村役員）、現地エンジニア

○重要語句○

・プロパー…ブタソンⅠ村の中心の集落、村の小学校があり村内で一番栄えている集落

・**citio**…村内にある集落の呼び名

・地区…citio 内にある地域の呼び名

○ワーク詳細

（１）ワーク地詳細

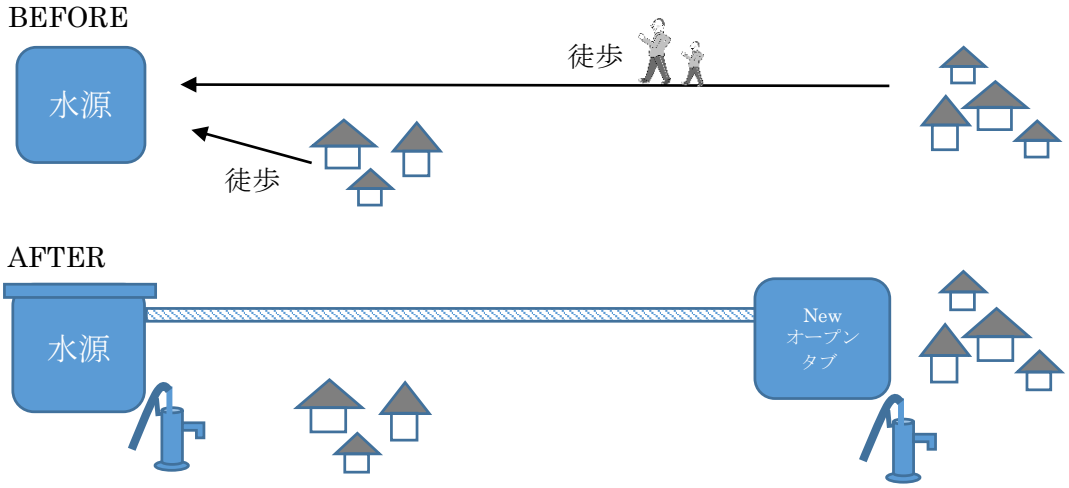
村	ブタソンⅠ	Citio 数	13	人口	489 世帯
問題点	・水道システムはプロパー（村の中心地）にのみ存在する。 ・全 citio に井戸はあるが、ほとんどの井戸にふたが無く、雨水や生活用水が混入してしまい、水の清潔さが保たれていない。 ・晴れの日が続くと水が出なくなる井戸も存在する。 ・村人の多くは、徒歩やボートで毎日数回、水源まで水汲みに行かなければならない。				
場所と 交通手段	・タバンゴの中でも山奥に位置する。 ・オルモックからは車を利用するが、村人の主な移動手段はハバルハバル・ボート・徒歩である。				
備考	・村ができた当初から水道設備の問題に悩まされている。 ・他団体から援助はあったが（道舗装・ヘルスセンター建設等）、水道設備の改善は行われたことがない。 ・村の 27%の世帯に利益がある。				

（２）ワーク概要

ブタソンⅠ村には 13 の集落があり、そのうち 4 つの集落（パラナス、パガバガン、ベリソン、マニゴン）で 6 つの水道設備の改善を行った。今回のワークでは、井戸（水源）のふたを作り、集落までパイプをひき、集落の近くにオープンタブやポンプといった公共水道設備を設置した。以下、各ワークについての概要を記述する。また、手順については重複する部分があるので簡略化している。

① マニゴン

戸数	34	電気	あり	トイレ	なし
主な問題点	・井戸の水は綺麗だが低い位置にあり開いている。洗濯や水浴び等の生活用水が井戸に戻り水が汚くなるため、飲み水には使えない。				
ワーク詳細	・ワーク期間は 3 日間。 ・井戸を綺麗にして、セメントでふたをした。 ・井戸付近のポンプを新しいものに交換した。 ・人口が多い且つ遠い集落までパイプをひき、オープンタブを作り、ハンドポンプを設置した。				



水源（補強後）

交換後のポンプの水圧

●ワークの手順

１．井戸の清掃

井戸の水を出し、内部を清掃した。
その後、水を入れ替え水質の向上を図った。

２．井戸を Closed タンクにする

木材でフォームを作り、そこにセメントを流し込み井戸を補強した。スチールバーを間に組み込むことで井戸のさらなる補強を図った。
カバーを取り付けセメントでふたをした。

３．ポンプの交換

井戸付近にあった古いポンプを取り外し、新しい高性能のポンプを取り付けた。

４．パイプをひく

水源から離れている集落まで新たにパイプをひいた。
通行の妨げにならないよう、パイプをひく経路にも考慮した。

５．ポンプ・オープンタブの設置

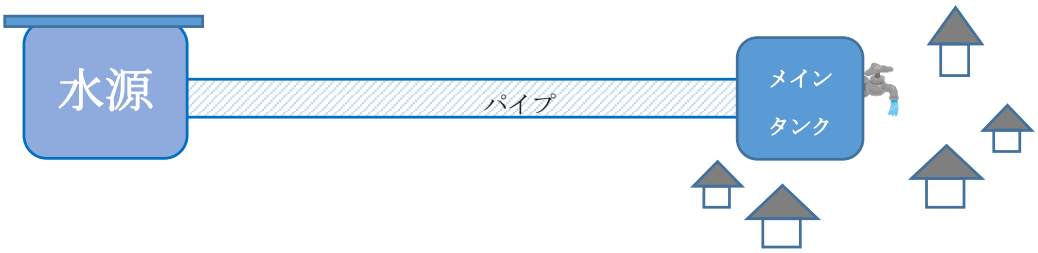
水源から離れている集落にポンプを設置することでいつでも自由に水を汲めるようにした。また、その場で水浴びや洗濯もできるようオープンタブも設置した。

６．モニュメント作り

整備した水源の壁面にモニュメントを設置した

② ベリソン

戸数	12	電気	なし	トイレ	なし
主な問題点	・飲み水を得るため、集落から約 300mのところまで朝と昼の計 2 回、水を汲みに行く。 ・水源にふたがない為、水が汚れやすい。				
ワーク詳細	・ワーク期間は 4 日間。 ・水源から集落までパイプをひき、集落にメインタンクを設置した。 ・水源を整備して、セメントで閉じ、水質の向上を図った。				
備考	・飲み水に利用している水源の水自体の水質はよい。 ・洗濯や水浴び等の生活用水は集落近くの井戸を利用している。 ただし、井戸自体は浅く、開いているため水は綺麗ではない。				



新しく作ったタンク

●ワークの手順

<u>1．タンク作り</u>

Ⅰ　タンクの型を木材で作った。板と板の間にスチールバーを組んだものを配置し、セメントの補強を図った。

Ⅱ　セメント：砂：小石＝１：２：２に水を加えながら、村人と一緒にセメントを混ぜた。
その後、皆でバケツリレーをしてセメントを型の中に流し込んだ。

Ⅲ　型を取り外した後、タンクの上部を建設した。
その後タンクの内部と外壁を水で溶いたセメントで整えた。

２．水源の補強

３．パイプの運搬・配置

４．蛇口の設置
作ったタンクの裏に村人が水を簡単に汲めるように、蛇口を設置した。

５．モニュメント作り

③　パラナス（1)、②パラナス（2)

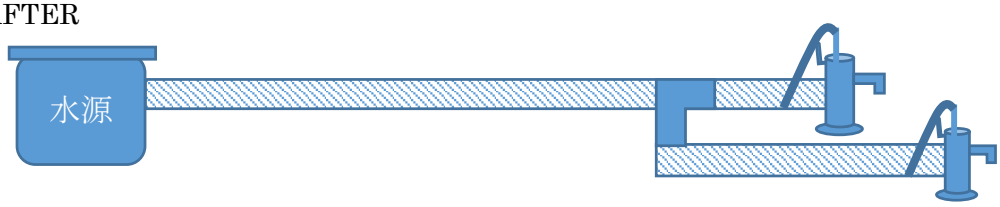
戸数	17	電気	あり	トイレ	2 戸あり
主な問題点	・生活用水を得るため、川の向こう岸までボートで水を汲みに行く。 ・歩いて行ける場所にも井戸があり、ボートのない家庭など少数の人は洗濯・水浴びなどに利用しているが、井戸自体が浅く、水量も少なくふたが無いため、水は綺麗ではない。				

ワーク詳細	・2 つのワークを実施 ・ワーク期間は 2 つ合わせて 1 日半 （1）対岸のワーク ・距離：140m ・水源からポンプまでの細いパイプを太いパイプに変えた。 ・対岸にあるハンドポンプは古く、硬く、また一押しで出る水の量も少ないため、新しい高性能なハンドポンプに交換し、水圧の向上を図った。 また、新たにハンドポンプを 1 つ設置した。 ・水源のふたを閉じ、水質を向上させた。 （2）少人数が使う井戸 ・井戸の上部をセメントで閉じ、上にポンプを設置した。

（1）

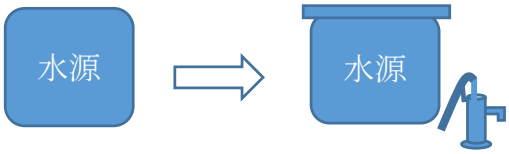
BEFORE

AFTER



（2）

BEFORE　　AFTER



（2）ワーク前の水源

（2）ワーク後

●ワークの手順

（１）

１．水源の清掃

２．水源の補強

３．パイプの交換

４．ポンプの設置

古いポンプの交換と、新しいポンプの
計２つのハンドポンプを設置した。
ポンプ台も新たに作り直した。

５．モニュメント作り

パラナス（１）では、タンクの壁面ではなく
独立したモニュメントを作った。

（２）

１．井戸の清掃

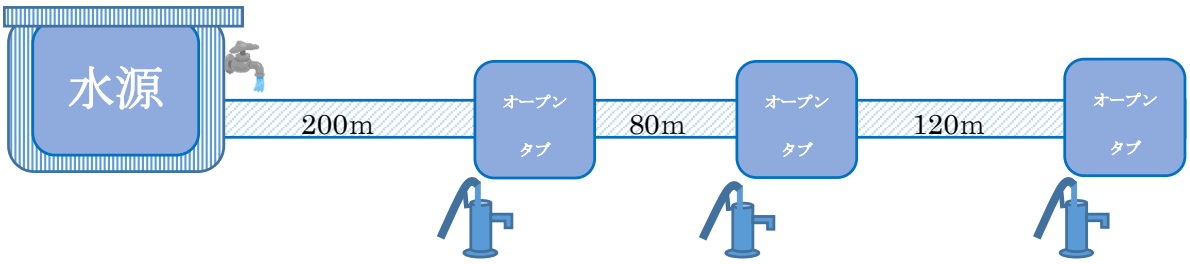
２．井戸の補強

３．ポンプの設置

４．モニュメント作り

④ パガバガン（中心地）

戸数	56	電気	90%あり	トイレ	10%あり
主な問題点	・集落から 300m先（徒歩 5~10 分）まで歩いて水を汲んでいる。 ・ヨランダ（2013 年台風）以前は集落までパイプを引いていたが破損。水源のタンクもダメージを受け、水漏れしている。 ・洗濯・水浴びは水源付近で行う。				
ワーク詳細	・ワーク期間は 4 日半 ・距離：400m ・水源のタンクをセメントで補強し、頑丈にした。 ・集落までパイプをひき、オープンタブとポンプを 3 つずつ設置した。				



ワーク前の水源

ワーク後

●ワークの手順

1．オープンタブ作り

集落内に 3 つのオープンタブを設置。

I　オープンタブを作る場所の地面を掘り、平らにした。セメントでできたブロックを並べ、型を作った。間にスチールバーを組み込み補強した。

Ⅱ　型が完成したらセメントに小石と砂と水を加えて混ぜた。最後に、セメントで周りを整えた。

２．パイプの運搬

３．ポンプの設置

設置した各オープンタブにポンプを設置した。

４．サンド・グラベル・木材の運搬

約 300m 離れた水源まで十数往復し、
タンク補強に使う資材を運搬した。

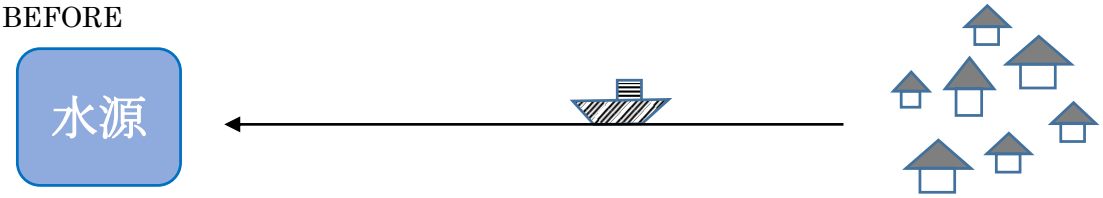
５．タンクの補強

６．モニュメント作り

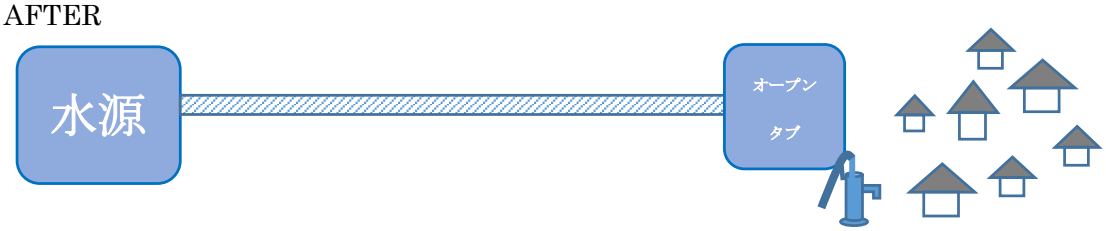
⑤ パガバガン（タウエル）

戸数	7	電気	あり	トイレ	1 戸あり
主な問題点	・1 日 2 回程度、ボートで水を汲みに行く。 （引き潮の際、歩いて水を汲みに行くこともある。） ・満潮の時は塩が入るため、パガバガン（中心地）の水源まで行く。				
ワーク詳細	・ワーク期間は 1 日半 ・水源から集落までパイプをひき、集落の近くにポンプとオープンタブを設置した。 ・水源は上部をセメントで閉じ、ふたをした。				

BEFORE



AFTER



●ワークの手順

<u>1．パイプの運搬</u>

ボートを利用し、集落から水源までパイプを運搬した。

<u>2．井戸の補強</u>

<u>3．オープンタブ作り</u>

<u>4．ポンプの設置</u>

<u>5．モニュメント作り</u>

○ワーク費の詳細

今回はレートが良かったことや、資材が予定よりも安く購入できたため、予定よりワーク費に余裕を持つことが出来た。到着前からロクロクさんが資材を予約していたこと、カガワットが車を出してくれたこともあり資材を予定通りワーク開始前にそろえることができた。資材はのほとんどはオルモックで購入し、そのほか買い足したものはレイテレイテやタバンゴ、オルモックまで買いに行った。

【予算の詳細】

●ワーク全体収支

収入	（ペソ）	支出	（ペソ）
助成金	125,888	資材費	111,988
		道具	3,750
		チェーンソー	3,130
		資材運搬費	2,220
		感謝料	4,800
計	125,888	計	125,888

●FIWC ワーク費詳細

	単価	数量	単位（ﾍﾟｯ）
パイプレンジ	400	1	400
マイナスドライバー	65	1	65
プラスドライバー	45	1	45
PE pipe 1 1/4	3900	6	23,400
PE pipe 1	4500	5	22,500
PE pipe 3/4	3900	1	3,900
PE pipe 1/2	18	150	2,700
スチルバー 10mm	88	30	2,640
GI pipe 1 1/4	820	1	820
GI pipe 1	560	4	2,240
サハラ	40	30	1,200
Jetmatic punp	3400	6	20,400
Foot valve 1 1/4	910	2	1,820
Foot valve 1	550	3	1,650
Swing valve 1	520	6	3,120

タイワイヤー	35	10	350
GI bushing 1 1/4	55	10	550
GI elbow 1 1/4	85	3	255
GI elbow 1	60	10	600
GI tee 1	95	6	570
GI nipple 1/2	30	4	120
GI nipple 1	55	10	550
Tape loon 3/4	25	8	200
GI bushing 1/2	30	3	90
GI plug 1	35	2	70
Nail #4	35	5	175
Nail #3	38	2	76
Nail #2	40	2	80
Nail #1 1/2	45	2	90
Frame	85	1	85
シャベル	240	10	2,400
バケツ	75	10	750
ハンマー	250	1	250
Hack saw	350	1	350
セメント	242	50	12,100
Swing valve 3/4	390	1	390
GI bushing 1×3/4	35	1	35
GI nipple 3/4	35	1	35
Teeflon		3	50
スチルバー　10mm	110	3	330
GI L bow 1	30	2	60
GI nipple 1×12	98	1	98
GI plug 1	25	1	25
GI bushing 1×3/4	35	2	70
GI nipple 3/4×5	35	3	105
Bushing reducer 1 1/4 ×1	65	1	65
PE pipe 3/4	38	10	380
Tapelon	30	1	30
セメント	255	1	255

サハラ	50	1	50
サンド・グラベル			5,800
チェーンソー使用費			3,130
資材運搬代			2,220
その他資材費			1,349
感謝料			4,800

計：125,888 ペソ

●感謝料

ロクロクさんへの感謝料は生活費が負担し、ココランバー（木材）を切ってくれたスキルワーカーへの感謝料をワーク費から払った。

○総括

今回のワークは、4 つの地区で 6 つのワークを行ったが、これは今までの FIWC が行ってきたワークの形式とは異なるものであった。また、活動の拠点とする市を移して最初のキャンプであったため、ワーク日程に無理があるのではないかと危惧する声があった。しかし、資材の遅れもなく、天候にも恵まれた。沢山の村人たちの協力のおかげもあり、当初の予定よりも余裕を持ってワークの全工程を終わらせることができた。水道設備という生活に欠かせないワークであったため、その利益は大きく、計 6 つの水道設備を各地に設置したことは住民の生活を大いに向上させた。現地エンジニアであるロクロクさんによると、水圧も十分であり、一年を通して各地区の村人へ十分な量の水が供給できるだろう、とのことであった。

また、短期間でワーク地を移動したため、前年までのマタグオブ市でのワークのように、同じ地区の村人と長い期間働き、親睦を深めることは出来なかった。しかし、ワーク地を移しながら今までよりもたくさんの現地人と交流できたという点では、ワークキャンプとして意義あるものになったのではないだろうか。今回、FIWC 九州としてはレイテ島タバンゴ市で行う初めてのワークであったが、無事ワークが成功し、村、そして市との信頼関係を築けた。これは、来年以降の FIWC 九州の活動にとっても重要である。ワークによる利益はもちろん、新しい市での基盤を固めるという当初の目標を達成できたことから、今回のワークは成功であった。

７．生活状況

衣

基本的に半袖半ズボン、サンダルといった、ラフな服装で過ごす。フィリピンは雨季と乾季があるが１年中暑く、最高気温が 30℃を超えるような日がほとんどである。熱中症にならないように帽子と日焼け止めは必須。日焼け対策としてアームカバーやレギンスなどがあるとよい。朝晩は冷え込むこともあるので、長袖のパーカー長ズボンがあるとよい。ほとんどの衣類は現地で安く購入できる。

食

フィリピンの料理は鶏肉や豚肉、野菜、魚を醤油や塩で味付けするので基本的に日本人の味覚に合うものが多い。主食は米でおかずが１，２品という献立が多かった。大皿に料理が盛りつけられ、そこから一人ひとり自分の食べる分をよそうかたちであった。日本人はスプーンとフォークを使って食べる。お祝い事やめでたいことがあるときは豚の丸焼きやヤギがでる。また、バナナ・ココナッツなど、亜熱帯のフルーツもたくさん食べることができた。ワーク中や食事のときは基本的に水を、その他ではスプライトやコーラ、コーヒーなども飲んでいた。生水を飲むとおなかを壊す恐れがあるため、必ずミネラルウォーターを飲むようにしていた。

住

今回は 2 か所にステイさせてもらった。1 か所目はプロパーのある地区で、スペースの関係上、男子 12 人は BRGY ホールの隣にあるヘルスセンターに、女子 6 人はカピタンの家の寝室を借りて 2 つに分かれてホームステイが始まるまで寝泊まりした。もう 1 か所はワークをしたパガバガンで、ナナイ・ピニング（重要人物紹介参照）の家に 18 人全員で寝泊まりした。カピタン家の寝室を除いて、どちらもゴザを敷いて床に寝る。カピタン家の寝室にはベッドがあった。

【風呂】

日本のように湯船につかるお風呂はない。フィリピンではバケツやたらいに水をためて、手桶ですくって水浴びをする「リーゴ」というスタイルが主であるので、私たちもそのやり方で行った。トイレにリーゴをするスペースがあるので、１人ないしは２人ずつおこなっていたが、人数が多く時間もかかったため、キャンパー何人かで服を着たまま外で一緒にリーゴをしていた。

【洗濯（ラバ)】

洗濯機はないので、洗濯はすべて手洗いでおこなった。たらいに水をためて、粉末洗剤を使って汚れを落とす。日本人は手洗いに慣れていないため、時間がかかるのに加え、たいして汚れが落ちない。キャンパー全員分の洗い物を当番制にして 4 人で洗った。

ラバ当番の人は、朝からラバを始めて、終わり次第ワーク地に向かっていた。

【トイレ】

フィリピンのトイレは、便座がなく、低くて小さい洋式便所が主流である。流すときはポリバケツにためている水を手桶ですくって流す。しかし、今回寝泊まりしたヘルスセンターには昨年できたばかりの新しいトイレがあった。そのトイレには便座があり、レバー式の水洗であった。トイレットペーパーを流すと詰まる恐れがあるので、紙はエチケット袋に入れてゴミ袋に捨てていた。

【買い物】

プロパー地区から歩いて 30 分ほどの船乗り所からボートに約 40 分乗ってタバンゴ市の隣のレイテレイテ市のマーケットへ行く。食料品、衣類、薬など生活用品全般を調達できる。ミネラルウォーターもここで買う。また、村には「サリサリ」と呼ばれる小さな個人商店があり、お菓子やジュース、酒、洗剤などのちょっとした買い物をすることができる。タバンゴ市から車でおよそ１時間３０分ほどのオルモックと呼ばれる港町では、村ではできない買い物や、日本円からペソへの換金もできた。

【交通】

プロパー地区からワーク地までの移動は基本的に徒歩。険しい山道をみんなで協力しながら歩いていく。今回はよく雨が降ったことも影響して、道がぬかるんでいたため、何度かこけたり足を滑らせて田んぼに足を突っ込んだりということもあった。けがをしないように心掛けた。また、パガバガンやマーケットに行くときはボートを使った。現地の青年が

舵をとってくれる。そのほかには、ハバルハバルという中型バイクやトライシクルと呼ばれるバイクや自転車に屋根付きサイドカーをつけたようなものを使った。空港－セブ港間はバンやタクシーをセブ港－オルモック間は高速フェリーを使い移動した。

ブタソンＩ村からの長距離移動に使用.　　ハバルハバル.

８．各係報告

＜会計＞

（仕事内容）

キャンパーからの金銭の徴収・管理、換金、収支記録

（料金の目安）

・スーパーキャット

セブ→オルモック（入港料 25p/１人を含む）　750p×18

オルモック→セブ（入港料 25p/１人を含む）　760p×18

・バンボート

プロパー⇔パガバガン、マーケット（往復）　100～150p１/艘

・トラック

プロパー→オルモック　4000p/１台

・バン

空港→ホテル　1000p/１台　　ホテル→港　1000p/１台

・その他

空港税　750p/１人

（フェアウェルパーティー）

村を出発する前日の夜にはフェアウェルパーティーを FIWC 九州主催で開催した。
ここでは、会計が支払ったものだけ報告するが、フェアウェルパーティーのために多くの村人が食材を提供してくださり、料理の準備はすべて村人にお願いした。

豚２頭・・・7,000P
ヤギ１匹・・3,000P
香辛料・・・3,700P

（レート）

60,000(円)×0.375 = 22,500(P)　(2016/02/19)
210,000(円)×0.412 = 86,520(P)　(2016/02/20)

(個人旅費めやす)（単位：円）

旅費	金額
航空券代	50,000
保険料	6,000
生活費	15,000
個人費	10,000
キャンプ参加費	10,000
合計	91,000

(収支報告)

収入　（単位：ペソ）

繰越金	2,369
生活費	109,020
くに、OB・OG から	450
助成金	10,072
合計	121,911

支出　（単位：ペソ）

宿泊費	ホテル(エキストラ)	1,500
食費	水	2,024
	食材	41,625
携帯	ロード	1,530
交通費	スーパーキャット	28,250
	バンボート	2,100
	トラック	5,500
	バン	14,500
	ハバル	1,250
	トライシクル	860
	ガソリン	2,061
感謝料	ロクロクさんへ	12,000
その他	生活用品など	1,563
合計		114,763

全体収支（単位：ペソ）
111,839—114,763 = 7,148

（反省）

・換金のレートがよかったので余裕をもって使っていたら、ワーク終盤で苦労した。

・レシートを積極的に発行するべきだった。

・毎日忘れずに帳簿をつけたので、金額が合わずに苦労することはほとんどなかった。

＜イベント＞

（仕事内容）

Japanese Festival の企画・進行、備品の準備

○ Japanese Festival ① [2/27(土) in パガバガン]

タイムスケジュール
13:00～　日本語教室
14:00～　ダンス
14:30～　歌

実際にワークを行い、5 日間滞在したパガバガンで 1 回目の Japanese Festival を行った。パガバガンでは午後のみの実施とした。

▸ 日本語教室

「おはよう」、「こんにちは」のような日常の挨拶や「かっこいい」、「かわいい」などの言葉を教えた。画用紙の表にビサヤ語または英語を書き、裏に日本語を書いて、村人たちに見せるような形で行った。村人たちには事前に用意しておいたルーズリーフと鉛筆を配り、実際に書いて覚えてもらった。鉛筆はプロパーでの第 2 回の Japanese Festival でも使用するため回収した。

▸ ダンス

ももいろクローバーZ の Chai Maxx を踊った。最初にキャンパーが踊って、2 回目以降は村人たちにキャンパーが教えながら一緒に踊った。

▶　歌

スピッツのチェリーとサザンオールスターズのいとしのエリーを歌った。事前に用意しておいた歌詞カードを村人たちに配り、一緒に歌った。いとしのエリーはタガログ語 ver がフィリピンでよく流れていたということもあって知っている人も多かった。

〈反省〉

事前の準備（ポスター貼り、子供たちへの告知、道具の準備等）はできていたが、天候に恵まれなかったため開始時間に人が集まらなかったり、急きょ屋内で行うことになったりして予定外のことが起きてしまった。しかし、村人たちを室内に入れたり、サウンドシステムの移動をスムーズに行ったりすることができたため大幅な時間のずれは生じなかった。

○ Japanese Festival ②［3/12(土) in プロパー］

タイムスケジュール

10:00～　日本語教室
11:30～　だるまさんがころんだ
12:00～　休憩（親子丼）
13:00～　ダンス
14:00～　じゃんけん列車・サックレース
15:00～　歌

パガバガンでの第 1 回 Japanese Festival の反省を踏まえ、私たちが滞在したプロパー地区で第 2 回を開催した。プロパーの住民に限らず、マニゴン、ベリソンの住民たちも遠い中参加してくれた。プロパーでは集落の規模の大きさから一日かけて行い、昼には村人たちに親子丼を振る舞った。

▶　日本語教室

パガバガンでの第 1 回 Japanese Festival より予定時間が長かったため、教える単語を増やして実施した。また、ただ教えて書いてもらうだけでなく最後にクイズ形式にしてより興味を持ってもらうようにした。

▶　親子丼

日本からすき焼きのたれを持っていき、その他の材料はマーケットで準備した。当日はキャンパーの代表４人がカピタン家で調理を行い、昼休憩のときに村人たちに振る舞った。大人にも、子供にも非常に評判がよかった。

▶　だるまさんがころんだ・じゃんけん列車

現地の英語ができる学生にあらかじめルールを英語で説明しておき、子供たちにビサヤ語に翻訳して説明してもらった。ゲームの最初の方は混乱もあったが、キャンパーが見本を見せたり、子供一人一人について教えてあげることによって次第にルールも理解し楽しそうに遊んでいた。

▶　サックレース

現地の子供たちにも馴染みの深いサックを使って行う競技のため、ルール説明もスピーディーだった。子供たちを４チームに分けて２回レースをし、最後にフィリピーノ vs ジャパニーズで勝負した。

▶　歌・ダンス

パガバガンと同じ形式で行った。チェリーは昨年のフィリピン下見キャンプの Japanese Festival で歌っていたのもあって覚えている村人も多かった。

〈反省〉

2 度目の Japanese Festival だったので準備などもできており、スムーズに進めることができた。しかし、遠くに住んでいる村人たちが昼休み以降戻って来づらいということが考慮できていなかった。また、午後のプログラムは遊びだけになってしまい、大人が参加できる内容になっていなかったことが反省点として挙げられる。

○ Beach Party [3/14(月)]

ワークの打ち上げとしてタバンゴ市のメイヤーのプライベートアイランドでビーチパーティーを行った。レンチョンバボイ（豚の丸焼き）やパンシットを振る舞ってもらったり、お酒を飲んだりと村人たちと非常に楽しい時間を過ごすことができた。

○ Farewell Party [3/16(水)]

キャンプの最終日にお別れの意味を込めて Farewell Party を開いた。開催したプ

ロパー地区の住民だけでなく、ベリソンなどワーク地の住民たちも集まってくれた。キャンパー１人１人の自己紹介をし、ダンスや歌の披露をした。
そして食事が終わった後は住民たちとお酒を飲んだり、一晩中村人たちとディスコを楽しんだりした。

＜保健＞

フィリピンの薬

（仕事内容）

保健バッグの携帯・管理、キャンパーに体調管理の声かけ

（反省）

・小さな怪我をするメンバーが多く、絆創膏が足りなくなる事態が発生してしまったので保健バッグの絆創膏の数を増やすとともに、個人で持ってくる絆創膏の量を増やす必要があった。

・保健バックのハサミが外に出たまま置きっぱなしになるということがあり、子供たちがそのハサミで遊ぶ危険性もあったので保健係がもっと責任を待って保健バッグの中身を管理するべきであった。

↓マッサージを受けている様子

・保健係がワークに参加できなかった時、保健バックを誰に預けたのかメンバー全員に伝わっておらず、必要な時に保健バッグをすぐ活用できなかったので、保健係が不在の時は誰に保健バッグを渡すのかメンバー全員に伝えるべきだった。

・保健バッグのお腹の薬の減りが早かったので、お腹の薬は各個人で多めに持ってきた方がよかった。

保健バッグ（大）の中身(帰国後)

レスキューシート	４つ	ヘパリーゼ	９つ	ビオスリーH	多量
ガーゼ	１袋	消毒液	１つ	つめ切り	２つ
ザ・ガード（袋）	３袋	虫よけスプレー	２つ	ピンセット	１つ
ザ・ガード	１ビン	ムヒ	２つ	ＥＶＥＡ錠	１箱
アルクイックＩＰ	１箱	体温計	１つ	冷えピタ	数個
正露丸	１ビン	ビューラック	多量	アクエリアス	数個
フィリピンの薬	複数個	赤玉はら薬	多量	包帯	１つ
絆創膏（大・中・小）		医療用テープ	３つ		
	それぞれ少量				

保健バッグ（小）の中身（帰国後）

レスキューシート	１つ	ムヒ	２つ
バンテリン	５つ	絆創膏（大・中）	少量
消毒液	１つ	虫よけスプレー	１つ
日焼け止めクリーム	１つ		

＜ホームステイ＞

（仕事内容）

・ＧＡＭでホームステイについて説明。
・村長にホームステイする家の候補を挙げてもらう。
・ホームステイする家の調査。
・ホームステイＭＴＧを開き、ホームステイファミリーに注意事項について説明し、サインしてもらう。

{ペア決定までの流れ}

１、候補の家を挙げてもらう

ＧＡＭ後にホームステイの概要を説明し、村長にホームステイ可能な家を挙げてもらう。今回のキャンプは１８人であり、６軒あげてもらった。

２、ホームステイ先の調査

家族構成、英語を話せるか、トイレはあるか、ペットの有無、等を実際に家に訪問して尋ねた。

３、希望調査

キャンパーにホームステイ先の家庭の詳細を説明し、第２希望までのホームステイ先と個人的な要望（苦手な人はいるか、男女ペアは大丈夫か、心配事はあるか、等）を紙に書いて提出してもらった。

４、ペア決定

希望調査をもとにホームステイ係でメンバーとホームステイ先を決定した。

＜ホームステイメンバー＞
１、さとる　まかよし　かずま
２、のり　りょうた　よしや
３、かな　あいな
４、しょうま　ともや　あまね　ゆう
５、りりこ　くるみ　だいじろう　かいせい
６、りょう　こうじろう

（反省）

りょうとこうじろうのホームステイ先が家の都合によりホームステイできないという事態が起きたが、村長の家に臨時でホームステイをするなど村長の協力で全員がホームステイを行うことができた。また、家族にサインをもらう際、急遽ホームステイ先からメンバー変更希望が発生し、ホームステイメンバーを変更するということが起きてしまったのでサインを書いてもらう前に決まったメンバーをホームステイ先に伝えておけばよかった。他にも、村長に頼りすぎてしまった部分があり、もう少し自分たちで動く必要があった。

＜KP（Kitchen Police）＞

（仕事内容）

キャンパーが心地よく生活できるようにサポートする。

１．洗濯（ラバ）、皿洗いのシフト作成

２．生活用品（桶・ハンガーなど）の管理

３．飲料水の管理

１　洗濯（ラバ）、皿洗いのシフト作成

出発前に、ラバ・皿洗いのシフト表を作成した。皿洗い２人、ラバ４人のシフトを作成したが、ラバについてはワークリーダーのシフトが重ならないこと、ジャパフェスがある日にはイベント係シフトにならないよう気を付けた。

（反省）

回数にばらつきが出ないよう気を付けたが、連日のシフトになってしまった場合負担が大きくなることがあった。

→シフト作成後、連日になっていないかなど、しっかり確認するべきだったと思った。

２　生活用品（桶・ハンガーなど）の管理

キャンパーにはトイレットペーパー２ロールを絶対に持ってくるよう出発前に呼びかけを行った。現地でハンガーの数が足りないとわかり、補充を行ったりした。

（反省）

トイレの中にトイレットペーパーを放置し、リーゴ（お風呂）などの際に水に濡れ、使えなくなってしまった。その結果、トイレットペーパーが足りなくなり購入することになった。

→トイレットペーパーをトイレに放置せず、使用後にはトイレ外に出すようにするべきだった。

３　飲料水の管理

飲料水はヘルスセンターにウォーターサーバーがあったため、そこにタンクを設置し、ペットボトルに移して飲んでいた。ミネラルウォーターのタンクは、最初マーケットで購入していたが、移動が長く大変であったため、途中からは村人が買いに行ってくれていた。また、ペットボトルが汚くなった際には、新しくペットボトルを購入し交換した。

（反省）

村人に水を買って来てもらうよう頼むタイミングが遅く、水が足りないことがあった。

→余裕を持って、早めに買って来てもらうよう頼むべきだった

９．他己紹介

りりこ

フィリピン四回目の頼れるジェネラルリーダーです。下見キャンプから、今回の本キャンプまで、みんなをまとめて、キャンプの成功に向けて一番悩んで、努力してたりりこですが、しばしばやらかしてました。フラグが立つとどうしても回収してしまうみたいですが、そーいうところも含めて林田さんです。チビとか小学生とかペチャパイとかもうそろそろ言われ飽きてるはずのに、しっかりリアクションしてくれると思います。一年間お疲れ様でした！　　From 友也

あいな

あいなはどんな時も全力!おいしそうに食べる姿(あいな周辺はご飯の減りが早いです)、ワークを楽しみ大笑いする姿(を見て村人も笑っています)、水を片手に全力で走る姿(子供への仕返しです)、その湧き出てくる元気はキャンパーにも伝わり、何度も元気を与えてくれました。そして、ミーティングやワーク時には、頼れるワークリーダーとしてキャンパーを引っ張り、ワーク完成へと導いてくれました!

From まかよし

ともや

普段はしっかりしていてクールで、サッカー大好きなワークリーダーのともや。夜のミーティングの際に次の日のワーク説明に一生懸命だった姿が印象的だったともや。でも、お酒を飲んですぐ酔ったり、笑のツボがはいったら止まらなかったりと、意外な一面も知ることができて良かったよ。周りを見ているともやの的確な指示はすごいと思ったし、ワークの時はみんながともやを頼りにしていた。ワークリーダーお疲れさま。一緒にキャンプに行けてほんま楽しかった。ありがとうな。　From 大二郎

りょう

熊！熊！りょう！そのごつごつしい見た目とは裏腹にとても心優しい熊です。力持ちおじさんの異名を持ち、ワークでは女子のみならず全メンバーが彼を頼りまくり日々筋肉を酷使していました。副ワークリーダーとしても頑張ってくれました！子供と遊ぶ姿はまるで誘拐犯のようだったけど楽しそうで何よりでした（＾＾）それと光次朗の寝言に散々キレてたけどあなたも人のこと言えませんよ。
一緒にキャンプ行けて楽しかった！さらま！　From りりこ

くるみ

みんなのお母さん、くるみ。キャンパーが病気やケガの時はすぐに駆けつけて、看病してくれていました。１つびっくりしたのは、フェアエルパーティーのとき、レンチョンバボイが出てきた瞬間にその目の前を陣取っていたこと。食に対する気持ちの入れ方が並大抵ではないなぁ。まぁいつもおいしそうに食べていて、にこにこしていたから見ていてほっこりしましたよ。MTG のときから時たま見せる本気のくるみ。彼女の研究している文化人類学からの見解は問題の核心を突いたものでした。

From こうじろう

よしや

赤玉命！サッカーうまし！！子供好き！！！(特に女の子)みんな大好き義也君！！！！真顔で放つ彼の毒舌には強烈なものがありました。保健係にもかかわらず腹を下すことが多く、「腹いてえ」が口癖だった彼は暇な時間があればすぐ子供たちと仲良く遊び、ミーティングでは自分の意見をテキパキと発言するなどとても輝いており、かっこよかったです。またフィリピンに行くまでにバク宙を完成させような。　From 一馬

かな

やっぱりきれいでみんなのお姉さん！やっぱりキャンプにかながいないとキャンプの平和は保たれません！個性豊かなメンバー達の中でかなが拾ってくれないと、きっとブタソンキャンプはもっとカオスになっていたことでしょう。かなの優しさと笑顔にたくさん救われました。途中足がゾウになっていたりしたけど、今回は何事もやらかすことなく帰国できてよかったです。　From ゆう

あまね

日頃はしっかり者のあまね。芯が通っているし、自分の意見をしっかりと言う所はすごいなと思います。フィリキャンでは苦労も多かったけど、めげずに、最後まで楽しんでいたから感心します。ところで、お酒がはいると彼女は変貌してしまいます。涙腺が緩み、叫び、果てには人の悪口まで言ってしまいます。まあ、そんな一面も天音らしいのではないでしょうか。

From りょうた

ゆう

「ゆうは？！」キャンパーの集合時にたいていゆうはその場にいません。しかしその姿を探すのは簡単。現地の女子高生や子供たちの集団の中、また誰かのお家の中でお酒を飲んでいたり、カニを食べていたり。ゆうは必ず現地の人と一緒にいます。そう彼女はフィリピン人からもてもて。持ち前のコミュニケーション能力の高さに加え、誰よりも素直に、誰よりも輝く笑顔で積極的に過ごしていました。そんなゆうの日本人キャンパーからのあだ名は「殺せんせー」。なぜこのあだ名が？そう思ったあなたに試してほしい。殺せんせーの顔とゆうの顔を思い浮かべてみれば、ほら、完全一致したでしょう。そういうことです。　From くるみ

りょうた

りょうたは常に冷静に物事を考えることができ、周りへのささいな気配りもよくしてくれるしっかり者です。勉強熱心なりょうたは今回のキャンプにただ楽しいだけでなく自分が来た意義を考えたり、他の人とは違ういろんな考えをもってる人だとわかりました。きれい好きなあなたはラバを自分の分を自分でやっていましたね、正しい選択（洗濯）だと思います。いつもはクールなのにトゥバを飲んでるときやカラバウに乗ってるときなど時折見せる笑顔が素敵だと思います。　　From りょう

しょーま

どの女子よりも美白なしょーま。だけど実は腹黒なしょーま。女の私よりもロン毛なしょーま。すぐに私を馬鹿にするしょーま。お酒を飲むとすぐに真っ赤になるしょーま。チャラそうに見えて実は真面目なしょーま。毎日毎日、びっしり日記を書いていたしょーま。悩みがあれば話を聞いてくれたしょーま。しょーま。しょーま。しょーま。しょーま。。。

From 天音

まかよし

　まかよしはキャンパーの中で一番心がきれいで、とても優しい人でした。そして自然をこよなく愛していました。美しい景色が見える場所や綺麗に星が見える場所など沢山教えてもらいました。また、キャンパーの雑なフリに対しても無視したりせず、すべて拾ってくれていました。本当ならスベり散らかしていたであろうボケに対しても危険を顧みずツッコンでいく姿を見て本当にいいやつなんだと思いました。今度、日本の美しい景色が見えるとこ教えてね。　From 義也

かずま

My brother かずま！！☆崖から落ちて全身負傷☆バスケでなぜか肩を負傷☆あいなとの絡みでみんな負傷☆酒で潰れて右往左往☆しかしウヤブを作り起死回生☆バク天バク宙まじかっけー☆ということでフィリキャンを人一倍楽しんでいた一馬！なんでも知っている彼はうるさいくらい、いろんな話をしてくれました。持ち前の明るさで村人と交流している姿を見ておじさん感動してました。これからも間違いなくフィリキャンや FI を支えてくれる１人ですね！！　　From 悟

さとる

今回も安定の現地人でしたさとるん！3 回のキャンプを共にしました！体を張って数々の笑いを届けてくれていた彼は、すっかり頼れるみんなのお兄さんとなってキャンプを支えてくれていました！、彼はほんとによく気がつく子なんです。気づいた時には村人と、キャンパーと、散々お酒飲んでいるし、ヘルスセンターで倒れているし、、でもだんだん強くなってきてる気がするのは、あたしだけじゃないと思うんだよね！！（笑）個性豊かなイベント係のおかげでジャパフェスも大成功でした！お見事！お疲れさん！！！　　From かな

かいせい

海晴はフィリピンでとてもモテました。楽しそうにダンスを踊り、子どもたちと戯れ、フィリピンを満喫しているように見えました。しかし、キャンプで共に過ごしていく中で私が唯一気掛かりだったのは、彼の頭が日ごとに伸びていくことでした。以前、保健係を経験した私でさえ、初めて見る症状でした。フィリピンの食べ物のせいなのか、気候が合わなかったのか、髪が伸びたのか。今となっては迷宮入りですが、日本に帰ってからは元のサイズに戻っていたので安心しました。　　From のり

だいじろう

フィリピンで覚醒しただいじろう。「だいじろう、あたまおかしい。」現地人もキャンパーもみんな彼のことをこう言います。１か月の間に「パンシットえーなぁ…」「投げたらあかんで！パスパスパス！」「奇跡の果実」…… 関西弁ばんばんでいろんな迷言を残してくれました。でも、そんなだいじろうは持ち前の英語力で GAM、ホームステイも大活躍！ポリスとも仲良くなって全力でフィリピンを楽しんでたね！一緒にフィリピン行けて楽しかったよ！ありがと！　From かいせい

こうじろう

「自分からは以上です。」「It's joking!」「Look me!」これらはすべてこーじろーの寝言です。彼は寝言が素晴らしく、起きているときよりはっきり聞こえるんじゃないかというレベルで寝言を言います。おかしいです。でも、そんな彼はキャンパー１のイケメンです。気配りや優しさの面で言ったらピカイチです。誰よりも一歩先のことを考えて行動したり、子供たちと交流したりしている姿を見ると本当に良い先生・お父さんになるだろうなぁと思わせてくれます(^^)/　　From あいな

のり

楽しいことを製造してくれる人！とにかく頭が良くて機転がきくのでとっさにおもしろいことを考えつきいつもみんなを笑わせ、すごいなって思います。またキャンプ中はお笑い以外のことでもその機転の良さでいち早く重要なことに気づき、それをみんなに気づかせてくれてとても助かりました。ありがとうございます。それとキャンプ初日のホテルでのスワン事件は忘れません。（笑）　　From 正真

１０．感想

<Ririko>

下見キャンプから約 5 か月経ち、いよいよ本キャンプ。新キャンパーが 11 人も集まってくれたことがまず嬉しかった。ワークを成功させなくてはならない、そしてみんなにフィリピンを楽しんで帰ってきてほしい、そんなプレッシャーを抱えながらキャンプは始まった。

まず改めてマタグオブは FI が 10 年間活動してきて、日本人への理解があったということを感じた。正直当たり前に感じていたかもしれない。ホームステイの受け入れがすんなりいくことも、GAM するって言ったらたくさんの人が集まってくれることも、バヤニハンが集まってくれることも。10 年間先輩たちが続けてきて生み出された環境だったのだと身に染みて感じた。

そんな中ワークは順調に進んでいた。しかしふとこれでいいのかと思った。今回ワーク地が 4 か所あり、そのうち 3 つはステイ先とワーク地が異なっていた。また専門的な作業が多くなかなかバヤニハンと一緒の作業ができないこともありコミュニケーションが取りづらかった。また、1 つのワークが終わると次のワーク地へ移動するということを繰り返してしていたため、1 つの場所でワークする期間が村人と仲良くなるには短いなと感じることもあった。私たちの目的はワークを無事終わらせることももちろんだが、日本人と一緒に現地住民自ら事業を行い、生活を共にすることで村を活性化することである。ただワークを進めるだけではいけないと思い、難しそうなバヤニハンの作業を手伝おうと努めたり、シャイな青年に話しかけたり、休憩時間に子供とバスケしたりして交流を図った。同様にだんだん積極的になるメンバーが増え、多くの村人たちと仲良くなることができた。そのためフェアウェルパーティでは多くの人達がワーク地以外のいろんな場所からも来てくれた。私たちのことを知って関わってくれた人が増えたことが分かり、次のキャンプにつなげることができたのかなと感じた。

また滞在していたプロパー地区でワークを行わないことも気にかかっていた。自分たちには必要のないミネラルウォーターを遠いマーケットまで買いに行ってくれたり、大人数のごはんを作ってくれたりとプロパー地区の人に私たちの滞在で一番迷惑をかけたはずだ。もしかしたら快く思っていない人もいるのではないかと思っていた。そんなプロパー地区にカラという女の子がいた。カラは親が働きに出ており家が無いためサリサリで住み込みで働いている。ジュースを買いにいくたびに見るカラの笑顔が大好きだった。村を出る前日にも私はカラのところにジュースを買いに行った。

するとカラがいつもの笑顔ではない。明日帰るんでしょ？と聞かれたのでうなずくとカラは「毎日楽しかったよ。明日から村に日本人がいないことを想像すると寂しい。」と泣き出した。こんな風に私たちと共有した時間を楽しかったと思ってくれている人がいたということが本当にうれしかった。私たちは何にも与えられていないのに、日本人を理解しようとしてくれて、たくさん助けてくれて、プロパー地区の人には本当に感謝している。

今はまだタバンゴで私たちのことを知っている人は少ないし、村が急に豊かになり始めるわけでもない。しかし何年か経って、もしかしたら後輩たちがタバンゴでキャンプを続けてて、私たちのことを知ってくれている人々が増えて、笑顔がもっと増えていたら、私は心からタバンゴでキャンプやり始めて良かったと言えるのだと思う。

私にとって 4 回目のキャンプ。あんなに非日常だったキャンプは日常化していた。その分ビサヤ語でわかる言葉がだいぶ増えたし、フィリピン人の生活や性格を知れば知るほど大好きになっていった。家族や友達をとても大事にして、貧しくてもお客さんを全力でもてなし、楽しませようとしてくれる。つらい顔見せずにいつも笑っている。暑いしお風呂無いし、フィリピン人適当すぎるし、住むのは無理だ！と思っていたのが懐かしい。(笑)4 回も行けてよかった。そしてまた絶対に村人に会いに行きたい。

最後にメンバーをはじめキャンプに関わってくれた方々、本当にありがとうございました。特にフィリピン人であり私たちのことを理解してくれているロクロクさんの存在は言葉にできないほど大きく、感謝しても感謝しきれない。MTG うまく進めたり、全体を見て準備したり行動したりすることが上手にできなくてつらくて悔しくて泣いたこともあったが、なかなかできない経験をさせていただき本当に良かったと思う。こんな自分でも無事終えられたのは周りに恵まれていたからだ。1 年間ありがとうございました。

<Aina>

Butason-1 村で過ごした１ヶ月。３度目にして私のフィリキャン史上最強に充実した１ヶ月だった。たくさん考え、しっかりとキャンプと向き合い、そして全力で楽しむことができた。今年度のキャンプには下見からかかわることができ、活動の拠点をマタグオブ市からタバンゴ市に移るというフィリピンキャンプの大きな転機にも関わることが出来た。ブタソン１村で計６つのワークを行うことを皆で話し合って決定し、誇りを持って帰国した。しかし、日本に帰り OB 方からは応援の声だけでなく時にマイナスな声もいただいた。正直、悔しいという気持ちや不安な思いはあったが、たくさんの新キャンパーが集まってくれ、私はワークリーダーとしてなんとかワークを成功させたい！皆が楽しかったって終われたらいいな。という思いだけを持ってフィリピンへ帰った。

ブタソンでは村人が優しく迎えてくれた。ワークも天候に恵まれ、順調に進んでいった。しかし、今回はワーク地と滞在地が違うこと、ワーク地が複数あるということで各ワーク地のバヤニハンと接する時間が短かったり、技術的作業が多いことで日本人のできるワーク

が限られていたりした。そのため、皆がワークを楽しめていないのではないか、ワークキャンプとはなんだろうかといった葛藤の壁にぶつかりキャンプを楽しめなくなり、その不安をキャンパーに投げかけてしまったことがあった。そして、皆の意見で気づかされたことはワークキャンプの意義に正解はないということだった。18 人いれば 18 通りのとらえ方があるし、それでいいんだって思えた。皆違うからこそ、理解しようとすること・聞くことをもっと大切にしたいと思った。また気にし過ぎていたのは、過去にとらわれ比較ばかりしていた自分だけで皆それぞれの方法でキャンプを楽しんでいることがわかり気持ちが楽になった。それからは本来の姿を取り戻し、心からキャンプを楽しむことが出来た。（これについては言うまでなかろう…まぁ悩んでいた時より面倒くさかったかもしれないが笑）皆違っていいって思えるようになり、比較しすぎると本質を見失ってしまうということに気づくことができたのは自分にとって大きな収穫だった。

また、村に滞在中、自分たちが村にもたらす影響についてすごく考えさせられた。18 人の日本人が山奥の村に滞在するということは村人に「非日常」を与えることであり、それはよくも悪くも村に様々な影響を与えていると感じた。フィリピン人は日本人に優しさや温もりをくれ、いつも笑顔で接してくれるにもかかわらず自分たちの生活の大変さなどは隠す傾向にあった。ワークもフィリピン人に任せきりになることもあり、私たちがわざわざ現地に行ってワークをしなくてもいいのではないか、よくしてもらっているのにそれと同じくらいの何かを返せているのだろうかと感じることがあった。村人から日本人がきて村が明るくなったと言われても、じゃあさよならしたあとの村はどうなるのだろう、逆に虚無感が膨らむのではないかといった思いも強くなった。しかし、ワークが１つ１つ成功していくにつれ多くの人が笑顔で「ありがとう」と言ってくれ、うれしそうにポンプで水を汲んでいるのを見て確実に利益は生まれていると実感することができた。もしかするとこの達成感自体日本人の自己満足なのかもしれないが、遠く離れた地の村人と日本人が一緒に生活し友達になるということは奇跡のようなめぐり合わせで、「非日常」という貴重な時間を共有すること自体が大きな意味をもち、村人と親身になって交流できるのは学生にしか出来ないことであると思った。そしてこの出会いに感謝し大切な時間を存分に楽しみたいと思った。それが村人の力になれているかは分からないが、全力で素直に楽しむ！感謝の気持ちを忘れない！ということがせめてもの恩返しになっていくのだと思う。

なんだか、堅苦しい文章になりましたが本当に楽しいキャンプだった！18 人で１ヶ月を生活し、全員がこんなにもキャンプについて考えられたこと・タバンゴ市で新たな一歩を踏み出せたことを心から誇りに思う。キャンパーには心から感謝したい。フィリキャン第２章

はまだまだ始まったばかり。マタグオブをモデルケースにしつつ、でも過去にとらわれず自分たちのやり方で私の大好きなフィリピンキャンプが続いていってほしい。最後に、助言等いただいた OB の皆さんをはじめ支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。タバンゴという新たな地でキャンプを行い、マタグオブで先輩方が築いてこられた関係のすごさを知りました。市や村が FI を理解してくれているのを当たり前だと思ってはいけないということも知りました。多くの人の支えがあり無事にワークを、キャンプを成功させることができたと思います。私はフィリピンが大好きです。またあの場所へ戻りたいです。

<Tomoya>

今回で三回目のフィリピン、いつも行く前は不安だけど、いざキャンプが始まると帰りたくないな、と思ってしまいます。前回のキャンプは、本キャンプのみ、しかも後発での参加だったこともあり、とても楽しかったけれどどこか不完全燃焼な自分がいました。本キャンプを終えて、やはり自分も最初からキャンプを作りたいという思いがあり、下見からキャンプに参加しました。そしてワークリーダーという立場で前回よりも深くキャンプに携わりました。下見キャンプに参加して、キャンパーの皆で話し合うなかで、今まで 10 年以上活動してきたマタグオブ市を離れ、新しくタバンゴ市に移ると決断しました。以前とは異なる市での survey は思うように進まず、限られた時間の中で最善の選択をしたつもりでした。しかし、日本に帰ってからは沢山の先輩方からの厳しい声がありました。市との信頼関係も実績もない中で、活動が上手くいくのか、一度に 6 つものワークは時間的に厳しいのではないか、今後の事を考えるともっと小さなワークでもよかったのではないか。今まで FIWC のキャンプを作ってきた人からの言葉はとても重たいもので、プレッシャーを感じ、もう一度キャンプについて考え直すいい機会になりました。それでもワークについては自分達と、ブタソン I 村の村人の協力があれば成功すると思っていたし、下見での決定を間違っていると思ったことはありませんでした。そうして臨んだ本キャンプでは、ロクロクさんの協力もあり、ワークは順調に進んでいきました。キャンプも中盤に差し掛かったころ、MTG で 1 つの話題が上がりました。それは去年とは異なりワーク地が短期間で移っていく中で、村人たちと一緒に働いて、仲良くなるようなワークキャンプが作れているのか、というものでした。この話についてみんなで話し合いながら僕が思ったことは、ワークを終わらせることに固執しすぎていたのかなということです。もちろんワークキャンプにおいてワークの成功はそのままキャンプの成功に繋がるほど重要だと思います。でも、それに囚われすぎて新キャンパーへの配慮も足りなかったと思うし、何より自分が村人と交流して働き、ワークキャンプを「楽しむ」ことを忘れていたのかな、と思います。このことを意識してからは、少

し肩の力も抜けました。自分自身キャンプがとても楽しかったし、他のキャンパーも楽しめたのではないかなと思います。ワークの成功という結果もしっかりと後からついてきてくれました。もちろんこうしてキャンプが成功といえるほど形になったのは沢山のフィリピン人の支えがあったことも忘れてはいません。タバンゴ市では何の実績もない、学生の集まりである私たちを信頼し、受け入れ、数え切れないほど協力してくれました。最後に、今回のキャンプによって築いたものを、次のキャンパー達が引き継いで、沢山のフィリピン人を笑顔にしてくれることを願っています。協力してくれた皆さん、本当にありがとうございました。

<Ryo>

今回の BUTASON camp が私にとって初めてのフィリピンであり、初めてのしっかりとしたボランティア活動だった。フィリピンについてからは目に映る光景すべてが新鮮で、毎日わくわくしていた。日本では冬だったのに、フィリピンでは日差しが強く、街中は出店のようなものが並び、見たこともない乗り物で移動し、知らない人でも気軽に挨拶をしてくれる村の人々など、とにかく私にとってはすべてが刺激的で心踊らされる日々が続いた。

ところで、今回私はワーク副リーダーという役割を得たのだが、係の仕事についてはワークリーダーの二人に頼り切ってしまっていた。このことは申し訳ないという気持ちと後悔の気持ちでいっぱいである。私は下見に行ってなかったためワーク地の状況やキャンプ自体が初めてでワークの用語などわからないことが多すぎた。しかしそれは全部言い訳で下見や昨年の報告書をもっと事前に読んだり、リーダーにもっと積極的に質問していくべきだったと思った。結果として無事すべてのワークを成功させることができたのはロクロクさんやワークリーダー、キャンパーのみんな、たくさんのバヤニハンのおかげだ。本当に感謝している。反省は活かしてこそ反省なので、必ずこの気持ちを忘れずに今度は自分でキャンプを主体的に作り上げ、周りを引っ張っていける存在になりたい。

このキャンプ中で思ったことは、私たちがやっているワーク、そもそも日本人がキャンプでフィリピンの村に滞在することは本当にその土地の人々にとってよいことなのだろうかということである。キャンプ前の MTG で少し触れられた自己満足であったり、自分の成長のための経験などと捉え違えてしまっていないかなどの疑問が生じた。実際、私たちが村に滞在することで、村人は日本人に生活する場所や食事を提供したり、日本人の護衛として警察を用意したり、ワークの中で私たちができることは限られていて、用量も悪く、足手まといになってしまっているような状況もあった。そんな中、村で病気にかかってしまった子供

がいて、その子をキャンパーが少しずつお金を出して病院にいけるお金を用意したということがあった。幸いその子はそれで一命をとりとめたようだったが、私は村人はいつも笑顔で対応してくれているが、私たちの知らないところでそういったことが起きているのかもしれないと考えると衝撃を受けた。また、村の子供に連れられ、少し離れた家に入れてもらうことがあった。そこは他の家と比べても明らかに貧しく、何もなく、ただ家の奥で住人が寝ている光景を見て、このキャンプ自体が正しいのかどうか分からなくなってしまった。
お金がすべてではないと思うし、村人との交流、友情を築くことがワークキャンプの醍醐味であると思うし、自分よりはるかに村人のことを考え計画を立ててくれた下見キャンパーやロクロクさんにはおこがましいとは思っているが、本当に村人の利益だけを考えるなら、日本人がお金を寄付するほうが効果はあるのではないかとも思った。そういった迷いがありながらもキャンプの中で私が思ったことは日本人一人一人ができることは微力かもしれないけれど、私たちが現地の村に行って村人と一緒にワークをすることで、村のインフラを整備するきっかけを作ることはできるし、少しでも村人の生活の向上に役立っているのであれば、そこには大きな意義があると思う。キャンプを通してフィリピンの人々と毎日交流したり、一緒にワークをしていく中で深い絆が生まれたことは間違いなく、日本に帰ってきてからも寂しさを感じたり、今もブタソンの人々が大好きでまたフィリピンに帰りたいという気持ちでいっぱいだ。このキャンプがあったからこそ、日本にいたままだったら一生関わることができなかったかもしれない人たちと笑顔を交わすことができたことは素晴らしいことだと思う。言語がうまく通じなくても、笑顔がそこにあれば相手を幸せな気持ちにすることができる。そんな笑顔を数え切れないほどたくさん見ることができたこのキャンプは心から素敵だなと思えた。いろんな迷いが生じたからこそ、今度は私も下見から参加したいと強く思ったし、もっともっと積極的に村人と交流してフィリピンのことを知りたいと思った。

最後に、いつも一緒に笑って、支えてくれたキャンパーのみんなと過ごしたこの１カ月は本当にかけがえのない経験になったし、いい仲間を持てたなと強く思った。本当にありがとう。

<Kurumi>

フィリピンに丸々一か月滞在した。現地のみんなと一緒に過ごした。ワークキャンプという形であった。私たちは住むところを提供してもらった。ごはんもつくってもらった。日本人の行動に危険が伴わないよう常に注意してくれていた。私たちにはわからないように裏

で手配してくれていたりした。日常生活を送るにしては私たちがいることは障害ともいえるくらい大きな迷惑をかけていた。家を訪ねりすると歓迎してくれた。お酒を一緒に飲んだ。お酒を飲んでも飲んでも次の一杯を進めてきた。たくさんたくさん食べ物を出してくれた。たくさんビサヤ語、ワライワライを教えてくれた。一緒にタガログ語のテレビを観た。思い出話や政治の話をした。いっぱい子供と遊んだ。日本人がいると子供たちは授業中であっても大騒ぎをしていた。日本人が帰ったあとも子供たちは私たちが滞在していた BRGY ホールの前に行き、「オケラ、オケラ」と言いながら淋しそうにしている。18 人という大勢の日本人があの村に行くことは滅多にないことであろうこと。これらはどれも事実。だけど私はこれらのことにどのような形容詞や副詞、どのような修飾をして語ればいいかもわからないし、どのように感じ取ればいいのかも本当はわからない。ただ事実は事実としてあるから、感謝して、伝えて、それに値するものを私たちも返したいと思うのは自然な流れだと思う。

私たちがワークを行ったこともあるが、その他の生活でフィリピン人からしたら有益なこともあっただろう。第一に日本人と一か月過ごした時間というものも大きなものであろう。それは私たちがボランティアで行っているからとかワークをしたからというわけではなく、ただ単に訪問者とそれを受け入れた者との関係に当てはまると思うからである。別にフィリピン人だけでなくて私たち日本人だって大勢の外国人がきたら楽しいし、その人たちの国での文化やその人の日常を知ることは十分な刺激である。その現象だと思って、別に私たちが特別ではないということを肝に銘じていた。前回感じた私たちは日常に参入する者、現地の人は参入される者、受け入れる側だということを意識すればするほど、現地の人が見ているもの感じているものを知りたいと思うようになった。そうするとワークキャンプで他のキャンパーに対して変な要求とかを持ってしまったりとかも申し訳なかったりもした。だからこそそういう風な考えにとらわれずに行動できる他のキャンパーがまぶしかったし、うらやましかった。

今回のキャンプは例年とちがって全員が一か月滞在している。先発後発もなく 18 人みんながおなじで、みんなが本当に「参加」できたキャンプだったと思う。本当にみんながきちんと一か月フィリピンで過ごした。すごいことだと思うし、だからこそみんなが真剣にフィリピン人と向き合えたと思う。そのことをうれしく思うし、この BUTASON キャンプのキャンパーであることを誇りに思った。

そして余談ではあるが、私がこのキャンプで得た大きなものがある。それはしゃべる速さである。もともとしゃべるのがのろいと言われていたが、帰ってきてキャンパー以外の人と話したときに驚いた。周りのひとのしゃべりがゆっくりに感じるのである。今回のキャンプにはかなり話すテンポの速い人が多くいた。自分の話をする間に次の話題へ移ること、また

は話し終えるまでに待たせてしまうことがキャンプ序盤にはあった。だから話に食らいつくために早口でしゃべるという技を私は身に着けることができたのではないかと考えている。私はそのことに多大なる感謝をしている。

BUTASON キャンプは終わるけれど、FIWC としての活動は続くし、今回一緒に行ったキャンパーの中から次代のキャンパーもいるだろうからこれからは OG としてゆるく見守っていこうと思う。

<Yoshiya>

今回初めてフィリピンキャンプに参加しました。福岡空港を出発し、目的地であるレイテ島のブタソン１に着くまでとてもハードスケジュールで疲れました。レイテ島についてからは主にトラック使って移動したのですが、人が乗りすぎて身動きがとれなかったのでとても腰が痛くなりました。ブタソン１に着いた時、正直楽しみよりも不安のほうが大きかったような気がします。

ワーク初日、やることは事前ミーティングでだいたい聞いていたけど、実際に現地でワークをやってみると想像していたのと全然違いました。４０キロくらいある土の袋を一人で３００メートル先の水源まで持っていったとき、こりゃあ１ヵ月ももたんなと思いました。少しも手伝ってくれないタノット（警察）に殺意を抱きながらひたすら運びました。（笑）やっと土を運び終わってクタクタになっているところに村人がココナッツを持ってきてくれて、本当に助かりました。ワークは正直きつかったです。でも慣れていくうちにあんまりきつくない土の持ち方を発見したり、村人と協力してセメントを作ったりして、楽しさも見つけることができました。

ブタソン１の子供たちとはたくさんの思い出ができました。最初のころは、私たちのことを少し警戒して近づいてこなかったけど、時間がたつにつれて一緒に遊ぶ子供の数も増えていきました。フィリピンではバスケが盛んでみんなとてもうまくて驚きました。その中でもジャンポーという少年が頭一つにぬけていました。私より２０センチも小さいのに一回も勝てなかったのがとても悔しかったです。他にも、一緒にソロイソロイ（散歩）に行ったり、サリサリ（駄菓子屋）に行ったりもしました。いきなり背中に飛び乗ってくる子や手を繋いでくる子を見ているとなんだか子供ができたみたいで楽しかったです。ウザい子も中にはいましたが、慣れていくうちにウザい子ですらかわいく見えてきました。

フィリピンではいろんな人にお世話になりました。ホームステイさせてくれたナナイフロー家のみんな、カピタン、ロクロクサン、タノットのみんな、いいはじめたらきりがありません。彼らに恩返しをするためにまたいつかフィリピンに帰ってきたいです。

<Kana>

3回目のフィリピンキャンプ。村に着くと、半年前に「またね」と別れたかわいい子供たちがバスケットコートから「アテかな！」と口々にわたしの名前を呼んでくれた。同様に下見キャンパーを呼ぶ声も聞こえた。前キャンプ地のブノイを訪れたときも、戻ってきたことへの喜びを感じたが、懐かしくて嬉しくて照れくさいようなこの感覚は今まで以上に特別なものがあった。

最後のキャンプ参加になるのだろうと、後悔ないように積極的に、今まで以上に村人と同じ時間を過ごしたいと思った。正直、いつも村人に名前を呼ばれるキャンパーが羨ましくて、そうでない自分は、まるで村に受け入れられていないかのような気持ちもあって、そんな心のもやもやを消すためにも、そう決めて日本を出発した。

1ヶ月間はわたしにとって今までのキャンプで1番長い滞在であった。そのことも含め、今回は村で生活をするという感覚が1番強かったように思う。村に到着して数日は、「積極的にならなきゃ」と心で唱えながら過ごしていた。しかし、村人の一員になりたい、溶け込みたいという気持ちが自分のなかで「村人と一緒にいた」という自己満へと変わっているのではないかとふと感じた。何を比べているんだって。それからは、自然と村人たちの輪の中に入れるようになった気がする。一緒に話したいと思った時に話しかけた。やっぱりみんなが笑顔で輪に迎えてくれる。フィリピンのこと彼ら自身のことをたくさん話してくれた。日本にたくさん興味をもってくれた。ずっとなんとなく消せずにいた「わたしなんか」という気持ちはもう無くなっていた。3回目にしてやっと、こんな当たり前のやり取りを心から楽しむことができたし、友達として過ごす、“村人と一緒に生活する”ということができたように感じる。

あれだけ不安だったワークも無事成功した。子供たちが楽しそうにポンプを押して水遊びをする姿を見たときは、1年前のキャンプでは感じることのなかった嬉しさがあった。

本当にたくさんの思い出と事件があった。長くてあっという間の一か月だった。村人たちの声は鮮明に耳に残っている。出発の日、日本に帰る実感なんて湧かない。村人と離れてしまうのはさみしいけれど悲しくはない。これは 3 回目のキャンプでもやっぱり思うことで、村人たちにまた会えること、会いにフィリピンへ戻って来ること、根拠もない自信のような感覚がいつも自分のなかにあって、次会える事を楽しみに別れる。

初めて市の移動とワーク地決定・帰国後の周りの反応。不安でいっぱいのキャンプだった。前回のキャンプと比べてしまってまた不安が募ったりした。でも、下見キャンパーで決めたキャンプに後悔は無かったし、本キャンプにあの 18 人でこられたこと、**ブタ**ソンの人々と

同じ時間を過ごせたこと、わたしが一員として一年間関わることができたことを本当に誇りに思うし、みんなに心から感謝しています！！

<Amane>

今回のキャンプを振り返って、一番に思うことは“行ってよかった”ということです。一か月間フィリピンの電波もない村に滞在できる人は本当に一握りです。その機会を得、そして実際にキャンプに参加できたことに本当に感謝しています。「与えるものより得るもののほうが多い」私はこの言葉をきっかけにキャンプに行くことを決めました。それまでのわたしはボランティア活動は偽善だ、自己満足だとずっと思っていました。何かを与えて、そのことに満足しているのだと。だからこそ、得るもののほうが多いという言葉が本当なのか、実際に自分の目で確かめたいと思いました。

実際にブタソンについたとき、下見キャンパーの名前を呼ぶ子供たちを見て、自分の名前を覚えてもらえるのか、仲良くなれるのか、本当に不安になりました。慣れないことばかりであまりご飯が食べれず悩んでいた時もありました。しかし、少しずつ子供たちや、村人たちに名前を覚えてもらえ不安な気持ちが薄れていきました。ワークでは、日本人に出来ることが本当に少なく、気づいたときにはウォーターシステムが完成していて、なんとなく達成感がなくみんなで悩んで話し合いをした夜もありました。しかし、ワークにおいても段々と村人たちと一緒に積極的に作業をしていくことでウォーターシステムが完成したときの達成感は強くなったし、水が出た瞬間のロクロクさんや村人たちの嬉しそうな顔は今でも忘れられない宝物になりました。

1 ヶ月間フィリピンに滞在し、自分達がなにを与えることが出来たのかと言われれば私は上記で述べた笑顔と答えます。ずっとずっと自分に何が出来るのか悩みながら生活していましたが、あの時の村人の笑顔をみて、これが私達が与えられたものなのかもしれないと思いました。そして得たものはというと、たくさんの刺激です。圧倒的な英語力、人と人とのつながりの強さ、人の温かみ、身体能力、絶対に勝てないなと思うことがたくさんありました。小学校の授業でしっかりと英語を学習しており、英語が話せて当たり前で、日本人があまり英語を話せないことに「日本では勉強しないの？」と聞かれたこともありました。また、村の人々のつながりは強く、誰かが誕生日のときはみんなで祝うし、家に他の家の子がいることも当たり前です。そして、私の足が腫れ、歩けなくなったときには、村中の人が会うたびに心配してくれました。日本にはない暖かいやさしさに包まれて過ごす 1 か月は本当に幸せで、たくさんの安らぎを与えてもらったと思っています。ワーク地への移動中は、

足場が悪く日本人はすぐに転んでしまいましたが、村人はそんな私達をいつも助けてくれました。村人達がいなければ私達は絶対に生活出来ませんでした。

このように振り返ってみると、やはり「与えるものより得るもののほうが多い」という言葉は本当でした。しかし、村人達を笑顔に出来たことには大きな価値があると思っています。また村人達を笑顔にするために私はフィリピンに行きたいと思うし、私にとってフィリピンはすでに帰る場所です。言いたいことはたくさんあるのに、なかなか言葉に出来ずつらいですが、本当に”行ってよかった”の一言に尽きます。キャンパー含め、村人達、OB.OG のみなさん、両親、私を支えてくれた全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

<Yu>

2 回目のフィリピン。前回の帰国時より今回帰国した時の方がよりフィリピンを好きになっていた。もちろん慣れもあるが、フィリピンでの生活が楽しくて、帰国日は本当に帰りたくなかった。帰国日前夜、遅くまでディスコの音楽が鳴りやまず、私は踊り終えてしまったら今一緒に踊っている村人たちとお別れか、と思うと、正直眠りたく、ずっとこの音楽を聞いていたかった。それほどフィリピンのみんなが大好きになっていた。

下見キャンプも含めこの 1 年間のフィリピンキャンプを通して今思うことは、「私にとってのフィリピン」と「私にとってのフィリピンキャンプ」の意味の違いだ。

「私にとってフィリピン」とは、また会いたい人たちがたくさんいる場所。生活を通して生きてる！と実感できて、日本と違う文化の中で生活することで日本では気づかないことに気づかせてくれて、私の知らないことをたくさん教えてくれる場所。

一方で「私にとってフィリピンキャンプ」とは。“キャンプ”という文字が入ると、とても人と人との繋がりを強く感じる。キャンプ中に結局は“人と人”なんだなと思うことが何度かあった。私は村人とたくさんおしゃべりするのが好きだ。ただ、たまに「これは本心なのかな？フィリピンだからかな？」と思うことが何度かあった。やはり国が違えば少なからず壁を感じることがある。しかし、よくよく考えてみると日本人同士でも完全な信頼関係なんて難しいのだから、当たり前のことかと納得できた。言葉や文化が違っても、日本人もフィリピン人も関係なく、みんな同じ人なんだなと、思った。FIWC がマタグオブで築いてきた信頼関係の大きさはすごいものだと思う。しかし、FIWC のタバンゴでの活動は始まったばかりだ。その最初の一歩のキャンプに参加できて良かった。これからまた時間をかけて信頼関係を築いていくことを

期待している。つまり、私にとってフィリピンキャンプとは、私たちがフィリピンに足を運んでいることに意味があると思う。そして、何よりこのフィリピンキャンプが継続していること、これからも続いていくことが一番大切なことなんだなと感じた。

最後に、このブタソン１キャンプに関われた１年間、いっぱい笑ったり悩んだり、とにかくとても楽しい時間でした。今はたくさんの人に感謝でいっぱいです。正直、自分がどう成長したとか分からないけど、この経験は必ずどこかで繋がっていくと思うし、無駄にせずに生かしていきたいと思います。

<Ryota>

今回の本キャンプは私にとって初めての FIWC のキャンプであった。今回のキャンプでは日本では経験できないことを数多く経験できた。行ってよかった。

まず、フィリピンキャンプで経験できたことについて。フィリピンは想像を超えるほどクレージーだった。ブタソン I の橋はどう見ても橋じゃないし、道もどう見ても道じゃなかった。でも、フィリピンは優しさあふれる国だった。現地の人や警察官が私たちの活動に同行してくれたし、多くの青年が手伝ってくれた。特に警察官との出会いは大きかった。日本では信じられないほど、フィリピンの警察官はフレンドリーだった。ほぼ毎晩お酒を飲み、ポリスバイクに二人乗りさせてもらったり、警察官のコスプレできたり、迷彩帽と T シャツをもらったり…。さらに、食べることのありがたさをフィリピンで知ることができた。パーティーの準備のために豚とヤギが殺されてから調理されるまでを１通り見て、生命を頂くとはこういうことなのかと実感した。そして何より、フィリピンの絶景を見ることができたのは本当によかった。今回のキャンプは移動が多かったので、日中は様々な絶景を見ることができた。夜は満点の星空に、空を飛び回るホタル。日本ではなかなか見ることができないものを見ることができた。

次に、フィリピンキャンプに対する私の考えについて。今回のキャンプから村が変わり、メンバーの中には不満もあったが、私としては今回の村の方が好きだ。前述したが、移動が多かったので多くの絶景を見ることができたし、移動は楽しかった。ただ、フィリピンキャンプは私が想像していたものとは大きく違っていた。私は大学生になってから２度海外に行った。その時は明確な目的があり、成長を感じることができた。今回のフィリピンキャンプには複数回参加しているキャンパーも多くいたし、経験者からのお話を聞く限りでは、非常に成長を感じることのできる１カ月になると考

えていた。ただし、いざフィリピンに行ってみると自身の成長を実感できる機会があまりなかった。そこがすこし残念なところだった。

最後に、今回のフィリピンキャンプは従来の目的とは違うものだったが、楽しい１カ月だった。行ってよかった。もう一度、フィリピンに行ってみたい。

<Shoma>

初めてのフィリピン、初めてのワークキャンプで分からないことだらけだったが、頼りになるキャンパーのみんな、優しい村人に助けられながらキャンプを楽しむことができた。今回自分がワークキャンプに参加したのは大学生の長い休暇をただ遊んで過ごすのではなく、なにか少しでも有意義なことに費やしたい、今しかできないことをしてみたいと思ったからだ。また高校の時からボランティア活動のような活動を一度は経験してみたいと思っており、このFIのフィリピンキャンプに参加するに至った。

実際に一ヶ月間、フィリピンキャンプに参加して日本ではできないような経験ができた。例えば現地の村人との交流、フィリピンでの生活、雄大な大自然に触れることができ、かけがえのない思い出となった。これらのことは今までまったく体験したことがない、新たな経験でとても新鮮であった。

しかし楽しいこと、感動するようなことばかりではなく、考えさせられることも多くあった。今回のワークキャンプで水道設備の改善をするにあたり、村人の生活地から水源までの距離が遠いことは前もって知っていたのだが、その道のりが遠いだけでなく想像以上に険しく、日々の生活で村人たちがどれほど苦労しているのかを知った。またその道は雨が降ると地面がぬかるんで滑りやすくなり、非常に危険でもあった。このような環境で生活をしている人々がいるということを知り、蛇口をひねれば水が出てくるという環境がどれほどありがたいことであるかを思い知った。

またフィリピンへ行き、格差を感じた。家庭によってある程度の格差があり、特に都会と村では圧倒的な格差があると感じた。もちろんどこの国にもお金持ちとそうでない人はいて、日本でも豊かな生活をしている人もいれば貧しい生活をしている人もいる。しかしフィリピンではその格差が水道設備の不十分、お金がなく病院に行くことが出来ない、学校に行けていない子供がいるといった日本では当たり前と考えられていることに現れていた。このような格差を少しでも無くすために、水道設備の不十分な地域でその改善を行うという自分達のワークが意義あるものであると感じた。

最後に、募金という形でお金を寄付して援助をすることも良いと思うが、このワークキャンプを通して実際に自分が現地を訪れて、実態を見てこなければ困っている人々の状況は分からないし、寄付だけでは自分の行いが本当に誰かの助けになれたのかどうかは分からないと思った。現地で村人と共に働き、ワークを完成させ、それを村人の人が使ってくれているのを見ることで自分達が少しは役に立てたと感じることができるのだと思った。
このフィリピンで過ごした時間は自分にとってどんな意味を持つのか、正直今はまだ分からないが、1カ月間で感じたことは自分を何かしらの形で成長させてくれたと思う。

<Mayayoshi>

キャンプに行く前の私の心境は、フィリピンにはどんな景色が待っているんだろう、そしてワークが成功した先にはどんなものが待っているんだろうといったものであったが、同時に、これから途上国に向かうんだという気持ちも持っていた。そして、その当時の自分が考える「途上国」という言葉には、貧しく、不便であるといった意味が少なからず含まれていた。いざフィリピンに降り立つとそこからはもう携帯を使えない。その環境にも恵まれ、フィリピンの景色、生活、村の人々との交流にどっぷり浸かり、心を動かされ、そしてまた自分自身と向き合い考えることが出来た。村人に挨拶をすると微笑み返してくれたり、洗濯をしているときには、村人が大切に使っている道具を、私たちを見かけては貸してくれたりした。そして無邪気に駆け寄ってくる子供たちと遊ぶ私たちを見て微笑んでいる人々。その日常の中の一つ一つから伝わる温かさは、言葉を越えて伝わって来るものであり、私は指折り程度の単語しか話せなかったが、少しでも感謝の気持ちが伝わるよう精一杯心を込めて言っていたのを覚えている。また、ワークを通して、村の人々の生活が良い方向へ転がるよう貢献できればという思いもより一層増した。しかし、私たちは技術者でもなければずば抜けた力を持っているわけでもなく、やれることは限られていた。そのため、ワーク開始後の最初の日々は無力さゆえの葛藤もあったが、キャンパーみんなが楽しそうにワークをしていて、汗を流した村人も共に楽しんでいる。その光景を見た時に、技術を持っていない若い学生だからこそ持つ魅力を感じ、私たちがお金を寄付するのではなく、自分たちの足で来て共に活動しているということの大切さを感じた。

そして、キャンプを通して自分の中での「途上国」という言葉への意味付けが変わったことが、自分にとっての大きな変化であったと思う。もちろん日本の生活は快適さに

あふれていて、滞在中にも日本の快適さが恋しくなる時もあった。だが、１ヶ月滞在してみて、村の人々はモノや環境を凌ぐ心の豊かさを持っているのではないかと感じた。そこには、生活の不便さはあっても、それが貧しさにはつながっていない。むしろ十分便利な生活を送っているにもかかわらず、それでもまだ新たな何かを追求し続ける社会に生きる私たちはどうなんだろう？と考えさせられた。澄んだ空気の中で、人と人が助け合い、自然と向き合い１日を生きていく、そんな日々を体感することで徐々に湧き出てきた疑問なのだと思う。私自身、経験も知識も乏しく、これからの長い人生に比べたったの１ヶ月という短期間で作られたこのような考えは浅はかなのかもしれない。だが、今キャンプで得た経験を忘れずに、何より、日本人を受け入れてくれた村の人々、優しさと笑顔にあふれていたキャンパーのみんな、そしてフィリピンの文化と自然に感謝をし、糧にしていきたいと思う。

<Kazuma>

人生の中でフィリピンの貧しい地域に１ヶ月間ステイし、ワークキャンプを行うという経験は１回できるかできないかの貴重な体験ではないかと思う。その貴重な体験をしに行く前、僕は「ただ行くだけのキャンプにはしたくない。フィリピンに行って何を学び、何を得たいのか、日本の生活の中では見つけられないものを見つけたい。」と目標を掲げてフィリピンキャンプへの準備を進めていった。僕がフィリピン行きを決断したのは、フィリピンキャンプ経験者の体験談だった。フィリピンに対してあまり興味を持っていなかった僕に対して話をしてくれた経験者の存在がかっこよく、大きな憧れを抱いた。いつしか経験者から聞くフィリピンの話が１つの楽しみになっていた。この人たちはどのような場所で、どのような感情を抱いたのだろう、と気になり、すぐにフィリピン行きを決意した。現地に到着すると、４人乗りのバイク、銃を当たり前のように持つ警察官、大きなヤシの木に登り、実を取ってくる人、空一面に広がる綺麗な星空、フィリピンで見たものすべてが衝撃的、刺激的だった。その中で目的であるワークが始まった。中にはかなりハードなワークもあり、かなりきついと思う日もあった。そんな中、僕は子供たちと遊んでいるときに右肩をケガしてしまい、４日ほどワークに参加できない日があった。みんなが笑顔でワークをしている中、ただ見守ることしかできないことに関して、すごく退屈でつらさを感じた。ワークができない日を通じてワークにかける気持ち、楽しさを実感することができた。また、すべてのワークに参加しようと張り切っていたのに、それが果たせなかったことに関しては心残りとなってしまった。他にも、気さくなフィリピン人に対してミニ人見知りが発動してしまい、なかなか会話を

することができなかったことなど、反省点や悔しさが大きく残るキャンプとなってしまった。もっと楽しみながらワークを行うべきだった、もっと積極的に自分から村人に話しかけるべきだった、他にもまだまだ多くの反省点が見つかった。これらの反省点は、次のキャンプで生かすほかない。次のキャンプでは後悔をしないようにより多くの準備をしてフィリピンに向かいたいと強く思った。今回のキャンパーは個性がとても強く、楽しい生活を送ることができたのも、みんなのおかげだと思う。最高の仲間とフィリピンで過ごすことができてとても最高だった。みんなありがとう。そして今回のキャンプを成功することができたのは、下見キャンパーのおかげだ。下見キャンパーのおかげで僕は色んなことを考える機会を得て、ワークキャンプの意味を再認識することができた。とても素晴らしいキャンプを作ってくれて本当にありがとうございました。
またフィリピンに行くときにはもう悔しい思いや心残りがないようにしたい。しかしそのためにはフィリピンに行く前にしっかりと準備をすることがとても大事だ。一回目のキャンプよりもさらに充実させたキャンプを目指して準備期間となるこれからを頑張っていきたい。

<Satoru>

魔術師とはなんだったのだろうか。かの有名なウィキペディアでは「魔術を使う者
魔法使い・奇術師（手品師）」と明記されてある。恐ろしいやつらだ。事の発端はキャンプの中盤、ちょうどパガバガンでのワークが終わりプロパーにもどった時だった。どうやらパガバガンに魔術師が３人いるらしく彼らのうちの一人が魔術師を馬鹿にした警官に魔術をかけ、警官が使っていた皿を割ったらしい。それを間近でみたロク〇クさんはこう語る。「恐ろしい。決して彼を怒らせてはいけないよ」この話をミーティングで初めて聞いたとき誰も信じるものはいなかった。しばらくして魔術師は僕が気に入って使っていた麦わら帽子が欲しいといいだしたらしい。全く。強欲なやつらだぜ。魔法カード強欲な壺かよ。藤田ニコルより玉城ティナ派の僕はあげるつもりなんてさらさらなかった。そんなある日からみんなの異変が始まった。よ〇や「なんか首いてー」かず〇「なんか肩がいたいっす」大〇郎「パンシットうまいなー」くる〇「痩せてきたよー」こ〇じろう「自分からは以上です」（寝言）
魔術師は末恐ろしい。結局、帽子は怖くなり魔術師にプレゼント。ちなみに空港での海晴を見る限りまだ呪いがとけてないキャンパーもいるみたいだ。

そんなこんなでいつの間にか３回目のキャンプの報告書を書いている自分が正直信じられない。３回も行って特にできるようになったことなんてないし、英語力なんてひどいものだ。ただ一つフィリピンという

国、ブタソンワンという村がどんどん大好きになっていったことは確か。キャンプから帰ってきたとき疲れた、やっと帰れたってより、まだ村に居たかったな、まだ村人と遊びたかったなっていう気持ちが強くあって、これは３回目で慣れているからだろうけど、ぼくにとってブタソンワン村は大切な存在だということの証拠。ステイを本当に楽しめた証拠である。楽しかった思い出の一つとして料理を最初から最後まで教えてもらいながら手伝ったことがあった。１８人分いやそれ以上の料理を毎日作ってくれるナナイやカピタンの手伝いになれたかはわからないけどその気持ちを知れたこと、共有できたことがすごくうれしくて、むしろ邪魔だったかもしれないのにありがとうと言ってくれてすごく得した気分だった。確かに国も違えば価値観も違い、うれしいと思うこと、悲しいと思うことも違うだろう。しかしその価値観の相違のなかでいかに多くのものを共有できるかが大切だと思う。最後の別れの日カピタンやカガワット、村人が泣いてくれて、ぼくらのステイをぼくらと同じように楽しんでくれたのがわかって、ぼくらと同じように別れを悲しんでくれていた姿がそこにはあって、本当にうれしかった。そんな彼らに出会えたこと、友達になれたこと、とても幸せだ。最後にブタソンワンキャンプに関わって頂いたすべての方　本当にありがとうございました。

<Kaisei>

初めてのフィリピンキャンプは「本当に楽しかった！」の一言だ。

この感想では書ききれないほどのたくさんの思い出がある。だからピックアップで書いていきたい。

まずはワーク。今回は滞在地とワーク地が離れており、移動時間が長かった。そしてワーク地までの道がもうすべるすべる。この一か月間だけでも何回こけただろうか。数えきれないくらいである。とても狭い道を夜そして雨のなか歩いてメンバーが崖から落ちかけたり、、、命がけの経験もたくさんした。作業が始まる前には全身ドロドロで「リーゴしたい」と思いながらワークをした。重いサンド、セメントをたくさん運んだ。ミックスセメントをたくさんした。そんな大変なワークであったが、村人たちと協力して行うワークは本当に充実感があり、達成感があり、楽しかった。

次にジャパフェス（Japanese Festival）。村人たちに日本の文化を伝えるというイベントだ。コスプレをして、ももクロのダンスを踊ったり、いとしのエリーを歌ったり、だいぶはっちゃけた。企画した日本語教室、じゃんけん列車、だるまさんがころんだ、サックレース、親子丼、、、日本の文化をたくさん村人たちに伝えることができてよかったと思う。

最後に子供たちとの触れ合いである。バスケットコートには常にたくさんの子供たちが

いた。バスケットをしたり、バレーをしたり、竹とんぼ、けん玉のような日本のおもちゃで遊んだり、ダンスしたり。子供たちと遊ぶ時間はとても楽しく、子供たちはみんな可愛かった。一人ひとりと自撮りして回った。フィリピンキャンプが終わるころには撮った写真の枚数が 1800 枚になっていた。また会いたいな、、、。

ほかにもこの 1 か月間は今まで全く経験したことないことばかりだった。リーゴ、ラバはもちろん。ハバルハバル、トライシクルのような初めて見る乗り物に乗ったり、ココナッツ飲んだり、テレビで見るような豚の丸焼き、鶏の丸焼きを食べたり、、、毎日が初めてばかりだった。

こんなに楽しいフィリピンキャンプを過ごすことができたのはいろんな人の支えがあったからだと思う。フィリピンキャンパーのみんな、ブタソン I 村の方々、ロクロクさん、みんなに感謝しています。Daghan Daghan Daghan Daghan Salamat!!!!!!!!!!

<Daijiro>

私は今回が初めてのキャンプだった。そしてまた、部活や学科の関係により今回で最後になることはわかっていた。そこで、キャンプ前から思い切り楽しもうと決めていた。もともと、キャンプの参加を決める前に発展途上国の暮らしってどんなものだろうか、という好奇心が強くあった。そして実際に行ってみると、そこでの暮らしは最初のうちは、想像以上にきついものだったが、想像以上に楽しかった。やはり、トイレも違うし電気も時々使えなくなると最初の一週間ほどは、不安でたまらなかったし、帰りたいと思った時もあった。しかし、そこで過ごしていくうちにあれ？こういうのも良いなとだんだん思うようになり、最後は帰りたくなくて仕方なかった。一言で不便といえば、それで終わってしまうが、それ以上に自分の中で感じたり、得る事が多く、このキャンプのおかげで何か考えが変わった気がする。が、これを言葉では表すのが難しい。

私がこのキャンプで大きく感じたものは”リアル”だった。同じアジアに住んでいるといえど、私達と価値観や生活が大きく違った。これらのことは自分にとって興味深いものでもあったし、知れば知るほど自分の考えの甘さを感じさせられた。また、この自分の感じた”リアル”は絶対にこのキャンプでしか感じることが出来ないものであり、かけがいのないものだと思った。

また、現地の人は、すごく親切で優しかった。私達が日本人だから、優しく接してくれたというのもあるだろうが、それ以上にその村人同士がお互いを支えあって生活を営んでいるというのが印象深かった。私が大学に入

り、人付き合いにおいて何か素直な付き合いがするのが難しくなってきたと感じることが多くあった。社会にでれば、そういったドライな関係がもっと多くなることも薄々気付いている。が、そういったものがフィリピンでは少なかったのではないかと感じた。何か利益を求めて人付き合いするのでなく、こんな風にお互いのためを思って、人付き合いが気軽にできる、そんな事実が私には素敵なものだった。
ワークに関しては、自分の判断力や要領の悪さから迷惑をかけることが多々あった。非常に申し訳なく思っている。が、ワークやイベント、ホームステイを通して現地の人とも仲良くなることができたのではないかと思っている。ココナッツを獲りに行ったこと、マーケットに行ったこと、ワークの際に子供と競争しながらセメントを運んだこと。一人のポリスが私にリメンバランスを渡してくれるためにユニフォームを家に取りに帰ってくれたことは、今思い出しても目頭が熱くなる。このように、思い出せばキリがないが、これらは自分の中で今も時々、胸の内を温めてくれる。なによりも、このキャンプは楽しかった。寒い夜にリーゴ（水浴び）をしたり、空港でココナッツオイルをとられたのも今となっては良い思い出であり、宝物だ。そして、なによりキャンパーのみんなが楽しく優しかったので、本当に充実できた日々を送ることが出来たのではないかと思う。
本当にみんなありがとう！Daghan Salamat! フィリピンでの日々は本当に一生の思い出です！

<Kojiro>

自分は学校の予定の確認不足で出発前からリーダーのりりこや航空券を手配してくれていたくるみをはじめ、キャンパーに迷惑をかけた。ワークの途中で帰国しなければあらない可能性もあった。今後福岡教育大生が FIWC 九州の活動に多く参加してほしいという思いも込めてこの場を借りて言っておきたいのだが、基本的には長期休みでも他大学にはない行事・指導などがあるので前もって確認して、学校側にも問い合わせて参加してほしい。私は、反省文を含めた手書きレポート６枚と引き換えに全日程参加できることが決まった。出発の２日前のことであった。

そんなこともありながら、はれてフィリピンに飛び立った。正直、どれだけ MTG で下見キャンパーや OBOG さんの話を聞いてもフィリピンがどのような環境で生活していて何を食べているのか、子どもたちは何して遊んでいるのだろうかなどなど分からないことばかりだった。こればっかりは行ってみないと分からないことだと思う。「百聞は一見に如かず」という言葉があるが、自分の目で

見たことが一番正しいと私は思う。フィリピンに到着し、私はさっそく自分の言語力のなさに気づかされた。相手が言っていることはある程度理解できるのだが自分の考えを伝えられなかった。日本での準備が不十分だったと後悔すると同時に開き直るしかなかったので、他の方法でコミュニケーションとれないか考え、スポーツにいきついた。現地の人たちは小さな子供から同世代の人たちはもちろんおじちゃん世代までみんなバスケットを楽しんでいた。そこに入っていった。異国の人間を優しくすぐに仲間に入れてくれたことが素直にうれしかった。彼らの言葉を理解できず、ルールもわからないから何度もはめられることもあったが。可能な限り彼らとバスケをした時間や、そのときに「俺の夢はプロバスケットプレーヤーだ」と現地の青年が語ってくれたこと、小さな子どもたちや女の子たちとゲームしたり走り回ったりした時間はかげないものになった。友達と過ごすであったはずの時間を快く日本人とともに過ごしてくれたことに感謝の念は尽きない。楽しい日々を過ごしながら、ワークも順調に進んでいった。今回のワークは今までより技術が必要であったようで、村人に多くの技術的なことをしてもらった。彼らにも彼らの仕事や生活があるだろうに朝からワークが終わるまでともにワークを手伝ってくれた。私たち学生には技術がなかったために村人がその分まで働いてくれて、はじめは、自分はもっと体力の限り働きに来たはずだ！と考えることもあった。しかしこれはワークキャンプ。村人にとって見ず知らずの人たちが勝手に何か作って帰っていった、となってはいけない。彼らとともに働き、休み、会話をし、協力して１つのものを作ることで、私たちが帰ってもより暮らしやすくなるようにしていってほしいと考えるようになった。ここでも一つ問題になりえると思うが、フィリピンの今が彼らにとって幸せなのかもしれないし、それを異国の人間が「日本をお手本に」と変えていく必要もないかもしれない。先輩方の言葉を借りれば、逆に邪魔をしているかもしれないのだ。水道システムのワークが完了し、今まで水源にいって水を汲んで帰ってきていた時間が、そばにポンプが出来て短い時間で済むようになったとき、余った時間で村人は何をするようになるのであろうか。こんなことを考えると、私たちの活動は間違いなく、村人の life style に変化を与えているのだと分かり、そのときやっと私たちの活動の持つべき責任を知った。他人の生活までも変えてしまう活動であったのだと。そのように考えながら過ごしていくとワークは何をもって成功とするのかはとても難しいことであるなとも思った。今回のワークで水道システムは整備され完成はしたが、成功はさらに先にあるのではないかと考える。５年後１０年後も今回完成したウォーターシステムが村人たちの生活を支えていってほしい。もちろん、これを契機に彼らの生活に利用しやすい形に変わっていくことも大切なことであると思う。

今回のワークキャンプではジャパニーズフェスティバルも開催した。子どもから大人までみんなが紙と鉛筆をもって書き写す姿、字の書けない年齢の子どもが「こうじろう書いて」と言ってきてくれたこと、彼らの学びたい気持ちや知りたいと思ってくれていること、またその好奇心がうれしくて、イベント係としての仕事は十分に果たせなかったかもしれないがとても楽しい時間となった。

MTG などでも同年代のキャンパーたちの意識の高さや自分の考えや思いをしっかりと伝えられる力をみて、勉強になった。前半にも書いたが、言語力を高めて、次は言葉でももっと交流できるようにリベンジしたい。他国の文化を知ろうとする前に、自分の国のことすら紹介・説明できないようではいけない。今後さらに勉学に励んでいきたい。このワークキャンプが終わるにあたり、メンバーにはもちろん、現地にも来てくださった先輩方、このキャンプに誘ってくれた友人、参加を認めてくれた両親、今回のワークキャンプに携わってくださった皆様に感謝したい。

<Nori>

彼女と別れて臨んだ 3 回目のフィリピンキャンプ。彼女、いや、元彼女をまったく思い出さずに過ごしたかというとそうではないが、それ以上に賑やかで楽しく、いろんなトラブルがあり、自分に何ができるのか、どうすれば役に立てるのかを考えながら過ごしたキャンプはとても生きている感じがした。とりあえず私が一番ショックだったのは、ブタソンの村人の価値観からすれば、私が不細工だということだ。それがブタソンの人の価値観なのか、フィリピン人の価値観なのか定かではないが、前者であることを願うばかりだ。日本でイケメンだというわけではないが、やはり悔しい事この上ない。無念。しかしキャンプは成功し、我々が作ったポンプが村人の日常生活になじんでいた光景はとても嬉しかったし、村人ととても仲良くなれたので来て良かったと思えた。歓喜。

【フィリピン本キャンプメンバー】

林田梨里子（九州大学３年）：キャンプリーダー
池山愛奈（九州大学３年）：ワークリーダー
田中友也（九州大学３年）：ワークリーダー
渡邉諒（九州大学２年）：ワーク副リーダー
野中くるみ（九州大学３年）：保健
高原義也（西南学院大学２年）：保健
平野佳奈（西南学院大学３年）：KP
中村天音（九州大学２年）：KP
田中ゆう（九州大学２年）：会計
國分崚太（九州大学２年）：会計
齊藤正真（九州大学２年）：ホームステイ
真壁良充（九州大学２年）：ホームステイ
花田一馬（西南学院大学２年）：ホームステイ
岩永悟（福岡大学３年）：イベント
久保海晴（九州大学２年）：イベント
古川大二郎（九州大学３年）：イベント
浅倉光次朗（福岡教育大学３年）：イベント
小林典史（西南学院大学３年）：イベント
呉唯意（九州大学４年）：国内

Mail▷ fiwcq@hotmail.com
Twitter▷ @fiwckyushu
FB▷ FIWC Kyushu
HP▷ http://fiwckyushu.jimdo.com

FIWC 九州 Kyushu